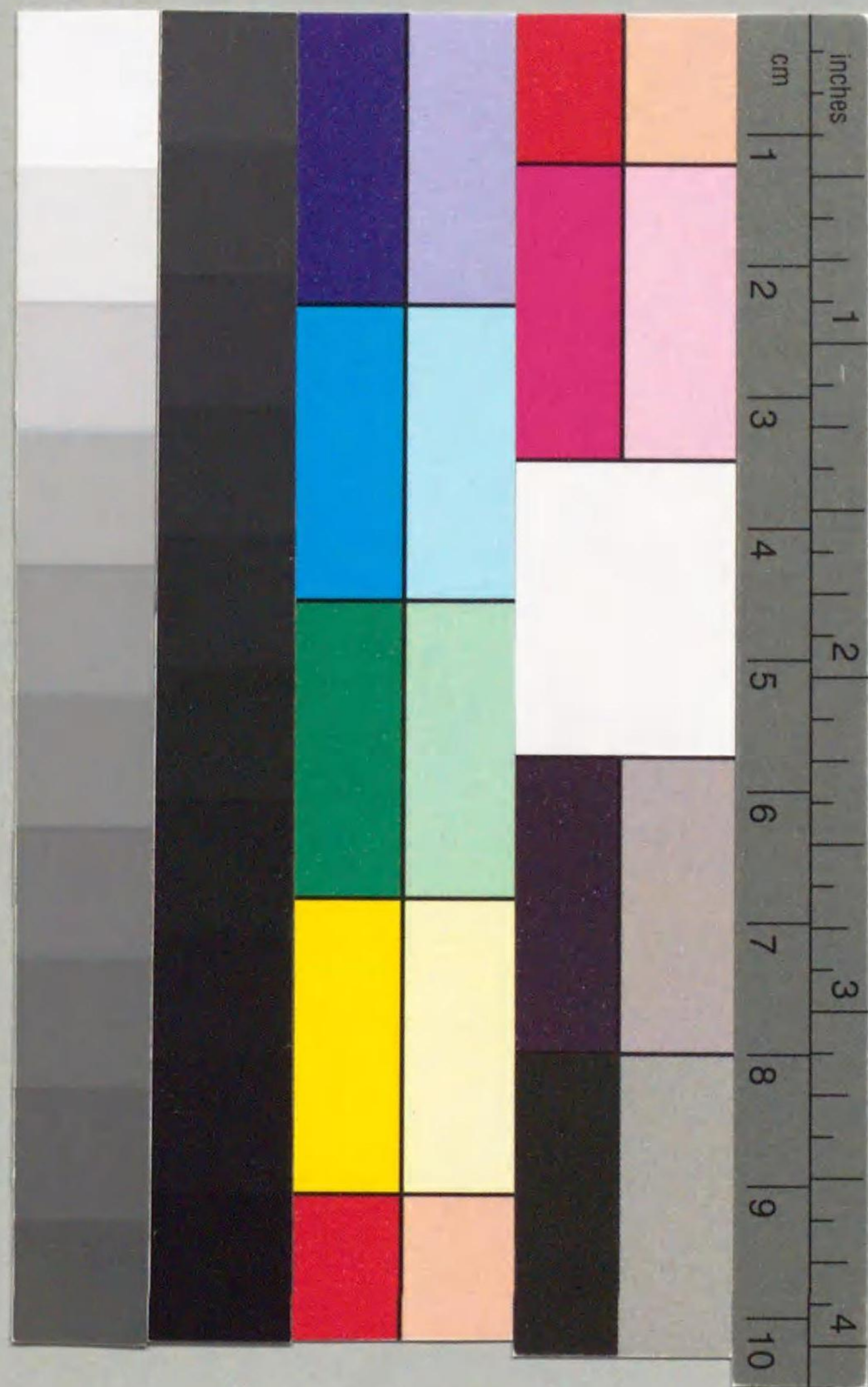



少年駁春
五年生
童話







水谷さまの学別童話

五年生の巻

少年駟者





へ方の兄父・にめたのんさ子お

この學年別童話六冊は、新らしく刊行するだけの意義を持たせたいので、私としてはいかなる作品をいかなる配列で収めるかについて、するぶん考へました。低學年には有名な話の再話もありますが、ほとんど私の創作です。いづれも明朝と健全とを主眼に、新しい教育的價値を持たせたいと心がけました。また形式としては、童話風のもと、小説風のもと、二つの傾向を適宜に組み合せて、児童の興味を偏頗しないやうに心がけました。保護者各位の御清鑑を得て、愛兒の心の糧としていただければ幸甚であります。

水谷まさる



水谷まさるの童話集
五十年史
おさんめしたの父兄へ



I 種
W



1200800508007



森 <small>もり</small>	西 <small>せい</small>	靴 <small>くつ</small>	鏡 <small>かがみ</small>	い	順 <small>じゆん</small>	小 <small>ちひ</small>
の	洋 <small>やう</small>	の	の	ざ	禮 <small>れい</small>	さ
小 <small>こ</small>	人 <small>にん</small>	物 <small>もの</small>	ない	と	の	な
		い	い	い	願 <small>ねが</small>	贈 <small>たま</small>
			ふ	ふ	り	り
鳩 <small>ばと</small>	形 <small>ぎやう</small>	語 <small>がたり</small>	村 <small>むら</small>	時 <small>とき</small>	ひ	物 <small>もの</small>
.....
二〇六	一八〇	一六八	一五三	一三九	一一〇	一〇一

發售立野道正先生



蕪 <small>かぶ</small>	春 <small>はる</small>	眠 <small>ねむ</small>	九 <small>きう</small>	少 <small>せう</small>	月 <small>つき</small>	ほ
と	淺 <small>あさ</small>	り	官 <small>くわん</small>	年 <small>ねん</small>		ん
大 <small>だい</small>	い	を	鳥 <small>てう</small>	馭 <small>ぎよ</small>		と
		盜 <small>なす</small>	の	者 <small>しゃ</small>		に
根 <small>こん</small>	頃 <small>ころ</small>	む	歌 <small>うた</small>			し
.....	な
八六	六七	四	二五	八	五	い
						け
						ど
					
						二

目次





The right page of the book is blank, showing the texture of the paper and some faint smudges.



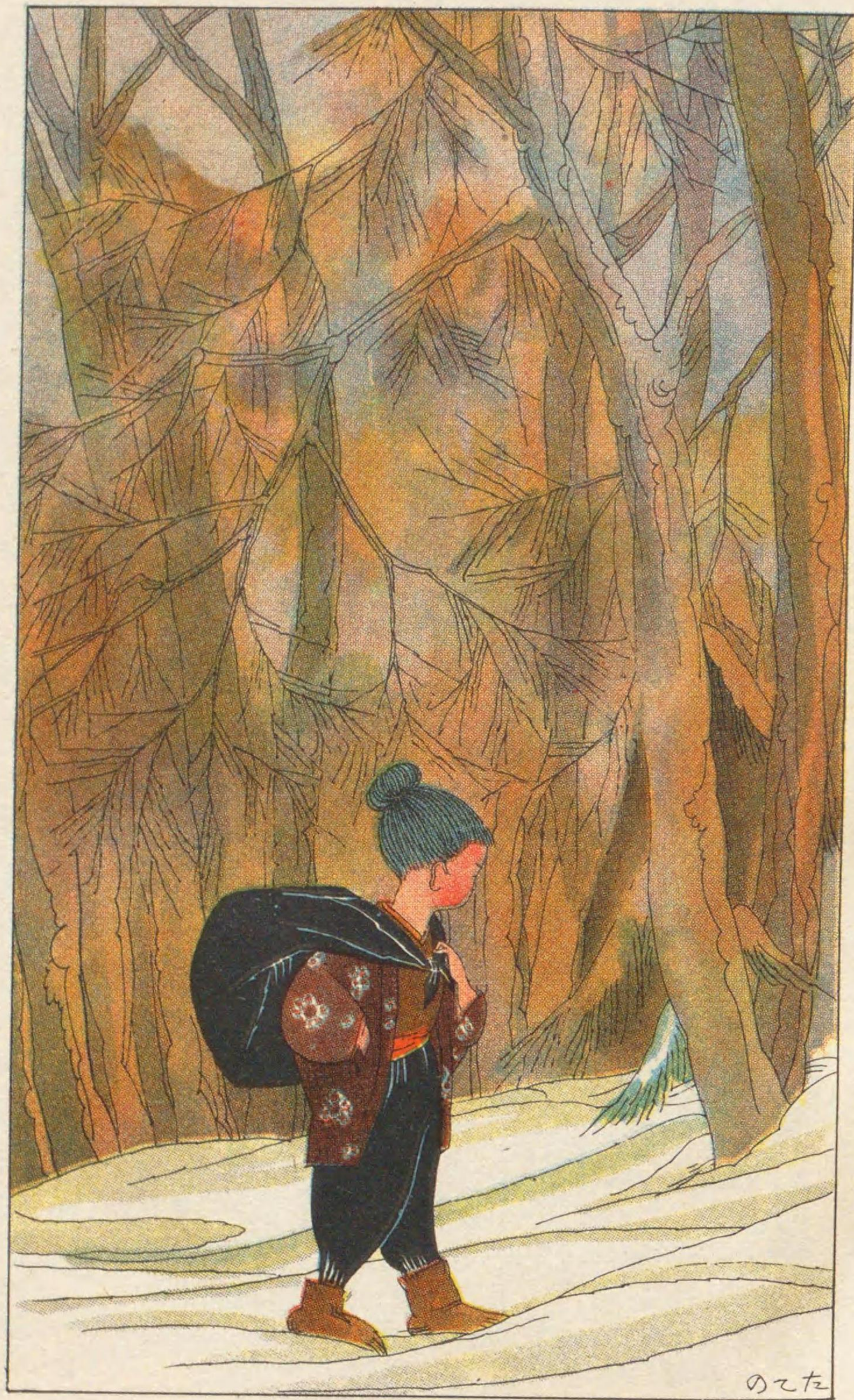
ある夕方、やさしい目をした旅人が馬車に乗った。その人はこの方がいいといって、馱者臺へ新太といつしよに並んで腰をかけた。

新太はその人から問はれるままに、いろいろの話をした。そして、いつも考へてゐることを話した。すると、その人は飛びあがつて喜んだ。

「うん、さうだ。この山や川は、君のいふ通り、自動車なぞより、馬車のラツバの方が好きなんだ。ほんとに、君は詩人だ！」

新太には詩人といふ言葉がわからなかつた。それで問ひ返すと、その人はいつた。

「詩人といふのはね、暖かい愛の心に燃えてゐる人のことだ。」



のこた

新太は、しあはせな氣持で、毎日稼いでゐる。父親も今ではすつかり安心しきつて、新太にやらせてゐる。少年駈者の新太は、一人前の仕事ができるのが、なによりうれしい。いや、それよりも、もつとうれしいのは、お客がたくさん馬車に乗ってくれた日に、町で父親の好きな酒を買つて來ることであつた。

「やあ、歸つたな。」

と、父親がむかへに出てくれた時、

「お父さん、今日はおみやげがあるよ。」

といつて、駈者臺の下から酒瓶をとり出すのは、なによりもうれしいのであつた。そして、父親の笑顔を見ると、仕事の疲れも忘れてしまつた。

少年駈者



おは 大きな風呂敷をつみを背負つて、お咲はわき目もふらずに
 ある 歩いて行きました。藁靴の下では、雪がきしきしと音をたて
 てきしみました。身体はほつと汗ばみました。そして、冷い
 風が吹くのが、却つて氣持よく思はれました。
 「もうちよつとだ！」
 お咲は自分で自分に勇氣をつけました。休みたいなと思ふ
 心を、たえず叱りつけました。
 お咲の香中の風呂敷をつみは、なにが入つてゐるのでせ
 う？ 暗いランプの下で、毎晩母親といつしよに、爐端で
 作った藁草履が入つてゐるのでした。それを町の間屋へ持つ
 て行つて、歸りに正月のお餅を買つて歸らうといふのです。

— 小さな贈り物 —

少年 馭者



「先生、あの……これを持って来ました……これつきり持つて来られませんでした……先生ごめんなさい。今年は、家ではお餅がつけませんでした。来年はわたし、夜業をたくさんして、もつと大きいのを持つて来ます。」

お咲がさういつて、さし出したのは、小さな白い紙づつみでした。先生は、お咲がひどく興奮してゐるので、ふしぎに思ひながらその紙づつみを開けました。

すると、そこには小さなお供餅がつつんでありました。

「まあ、お咲ちゃん！なんてやさしいことを……」

先生は父親のない貧乏なお咲に、こんな心配をさせたかと思ふと、いちらしくてなりませんでした。

— 小さな贈り物 —



ほんとにしないけど

ほんとにしないけど

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに見たんだよ。

あの夕やけの西の空
赤くそまつた雲のうへ
肥つたはだかのかはいい子。

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに聞いたんだ。

四

その子が鳴らす金の鈴

遠くかすかにさはやかに
胸にしみ入るいいひびき。

みんなはほんとにしないけど
ぼくはたしかに知つてゐる。

その子はぼくを好いてゐて
鈴を鳴らしてうれしそに
おいでおいでと誘つたよ。

月

月がほしいと
泣きながら
背の赤子は
手をのばす。

あれは取れぬと
云ひながら
子守はやけに
脊ゆする。

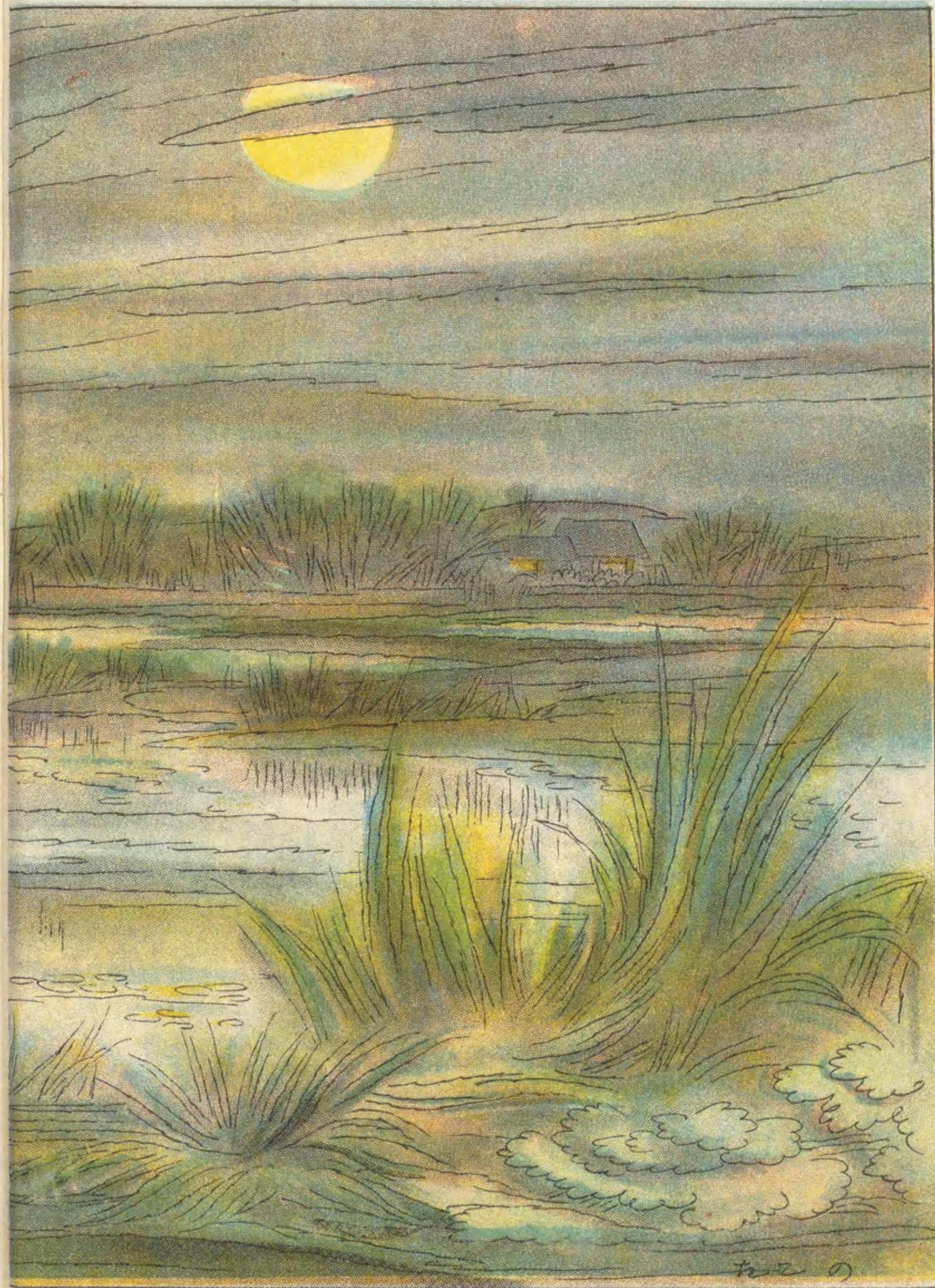
月

だけど子守も

つい昨夜
月を見てたら
かなしくて、

郷里に歸つて
行きたいと
泣いてせがんで
ゐたさうな。

五



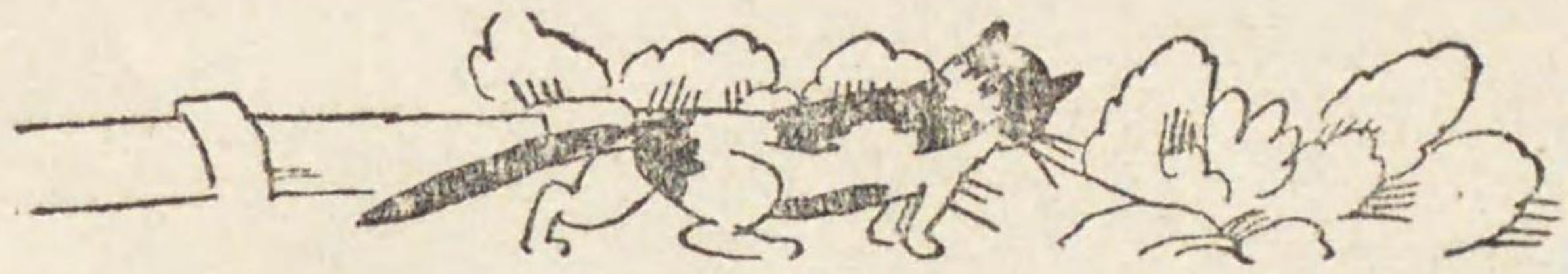
少年駈者

(一)

新太は、父親が馬車屋なので、もう二年この方、父親の手傳ひをしてゐた。新太は明けて十五であつた。

雨の日も、風の日も、新太は忠實に働いてゐた。彼が腰にさしてゐる眞鍮のラツバをぬいて、ブウブウブウと、頬べたをふくらまして吹く時、彼は一人前の仕事をしてゐるやうな氣がしてうれしかった。

ラツバの音は遠く響いて行つた。彼はいつもその音に、自分ながら酔つた。山峽にさしかゝつた時なぞ、殊にラツバはよく響いた。山から山へこ



だまして、遠く空へ消えて行くラツバの音は、彼の胸を波だたせた。その美し音色に耳を澄ましてゐると、彼の目にはいつか涙が浮んだ。

からごろと音をたてるガタ馬車の音も、新太の耳には一つの唄であつた。更に、父親が鳴らす鞭の音も、新太の耳には快よかつた。彼はいつも、馬車の後の踏臺に乗つて、馬車の屋根につかまつて、いろんなことを空想しながら、だんだんに變つて行く、あたりの景色に目を向けてゐた。

けれどお客の乗り降りに、荷物の世話をするのは新太であつた。馬に飼料をやるのも彼であつた。すべてが彼の仕事であるといつてよかつた。といふわけは父親は身體が弱くて、たゞ駈車臺に乗つて手綱をとつたり、鞭をあげたりするのがせいゝであつた。

そんなわけなので、新太としては、なにもかもさせてほしいとさへ思つ





た。父親が家で遊んでゐて、身體の養生をしてくれたら、自分は心配のな
いやうに、ちやんとこの仕事をやって見せると考へてゐた。けれど、父親
はまだ新太に、すべてを許さなかつた。すこし心配なのであつた。

「ね、父ちゃん、おらにやらしてくれよ。まちがひ起しやしねえよ。」

新太は、時々、父親にねだつて。鼻を鳴らすこともあつた。だが父親
は、

「たくさんのお客さまの生命をあづかる商賣だからなあ。」

といふばかりで、うすら笑ひを浮べて、新太の言葉にとり合はなかつ
た。

「父ちゃん、心配性だな。おらのこと安心できねえのかな。」

新太は淋しくあきらめるほかなかつた。やがて、すべてを許される日が



來たら、一生懸命に働いて父親に安心させ、父親のために好きな酒を、町
から歸る時に、買つて來て楽しませようなどと、楽しい空想に驅られてゐ
た。

だが、その日が來た。

妙なことで、その日が急に來た。

(二)

この街道へ、乗合自動車ができるといふ噂がたちはじめた。町の呉服屋
だの、宿屋だの主だつた商人たちが、共同でやりはじめるといふのであつ
た。

父親は、その噂を耳にした日から、眉をしかめて不機嫌になつた。



「なあ、新、おれたちの口は乾あがるぞ、自動車は早えからな。」
でも新太は、さうは思はなかつた。

「なあに、父ちゃん、心配するでねえよ。自動車にや自動車の客があるべ
えが、馬車にや馬車の客があらうな。馬車のラツバを聞いたら、どうでも
かうでも、乗りたくなるお客があるだあ。」

さういつて、新太はほ、笑んだ、新太の耳には、あの澄んで響くラツバ
の音が、その時ほんとに聞えてでもゐるやうに、かすかに響いて来るやう
な氣がした。

「なあに、おめえは年がゆかねえから、安心してゐるだが、とても競争にや
ならねえよ。」

父親の眉は、あひかはらすくらかつた。



二ヶ月も経つて、菜の花が咲く頃に、いよいよ町に自動車が出来た。そし
て、營業をはじめることになつた。そこにはびか／＼光つた自動車が、二
臺ならんでゐた。洋服を着た若い運轉手が、すらすらと取り巻いてゐる見物
の前で、巧みな操縦ぶりを、得意になつてやつて見せた。

「早えな。」とか「氣持がよかんべな、あれに乗つたら……。」とか、いろい
ろの言葉が、感心した見物の唇からもれた。そして、

「馬車屋は、商賣あがつたりだぞ！」

といふ言葉も出た。

いよいよ自動車が出来た、商賣をはじめたとなると、もう父親は我慢にも駈者
臺に乗つてはゐられなかつた。父親はやけ酒を飲んで、もう馬車を動かさ
ねえといひ張つた。



新太は父親の苦しみを察したが、強ひて平氣に、大丈夫なことを説いて自分が父親にかはつてやりたいといった。父親はてんで駄目だといつて、なか／＼、承知をしてくれなかつたが、やつとそれでも、やるならやつてみてもいゝといつて許した。

新太はうれしかつた。いよ／＼一人前の仕事をやるのである。だが然し警察で許さないので、父親には馬車へ時々乗つてもらふことにした。

新太は、今までよりも、もつと張り合ひのある氣持でラツバも吹いた。親切に、お客さんの荷物世話もした。馬の世話も、いそいそとしてやつた。そして、いつも自分が手綱をとつて、鞭をあげるのである。なんといふ、喜びであつたらう！ 新太の目は輝いた。彼は一つの小さな失策さへも、してはならないと心に決めた。

なるほど、新太のいふとほりであつた。

自動車ができても、賃金が高かつたので、珍らしい間だけは、土地の人たちも乗つたけれど、やがて、みんなは馬車を選ぶやうになつた。遠くから来たお客さんたちが、乗るくらゐのもので、自動車には一人も人の乗つてゐない時さへよくあつた。

(三)

新太のラツバは、ますますよく響いた。

彼は赤く頬をふくらまして、勢ひこめて吹きたてた。彼はラツバの響のなかに、また一つ新しい氣持をそそられた。それは、勝利の氣持であつた。





彼はこんな意味のことを思った。

「この昔ながらの山や川は、ガソリンの匂ひが好きである筈がない。また。警笛の響きが好きである筈がない、どうしたつて、この馬車のラッパが好きなんだ。がらごろと響く車輪の音が好きなんだ。」

彼はそんな意味のことを思ひながら、そのやさしい目を、山や川に向け

た。
ある日、もう夕方のこと、一人の旅人が馬車に乗った。やさしい目の人であつた。その旅人は、この方がいゝといつて、馭者臺へ新太といつしよに、並んで腰をかけた。ちやうど父親が乗つてゐなかつたので、馭者臺が空いてゐたからであつた。

ほかにお客はゐなかつた。新太はその旅人から問はれるまゝに、いろいろ

の話をした。旅人は、新太の話に、耳をかたむけた。その時、自動車の話も出た。新太は、いつも思つてゐることを話した。旅人は、飛びあがつて喜んだ。

「うん、さうだ。さうだ。この山や川が、自動車なんぞ好くものが！ 君のラッパの響きの方が、どんなに好きか知れたものぢやない。」

旅人はさういつて、新太の肩をたゝいた。
「ほんとに君は詩人だ！」

旅人はなん度もくり返していつた。
「詩人？」

新太にはわからなかつた。

「あゝ、詩人だよ、君は。詩人といふのはね、暖かい愛の心に燃えてゐる



人のことだ。」

新太には、よけいわからなかつた。

「おら、なんでもえよ。おら、馬車屋なんだ！」

旅人は、にこ〜笑つてゐた。そして、

「ます〜詩人だ。その氣持がすばらしいんだ。」

と、いつたが、小さく口のなかでつぶやいた。

「どうして、どうして、おれなんで、足もとにも寄りつけない。きれいな

心の持主だ。おれの歌なんぞ、つくりものだ。」

旅人は、旅の好きな、歌詠みであつた。

新太は、その旅人と別れる時、なんとなくの淋しい氣持になつた。

旅人も新太と別れるのを淋しがつてゐるやうであつた。旅人は新太に餘



分にお錢をくれた。そして、父親に酒でも買つてあげるがいいといつた。
その後、新太は、その旅人のことを、よく思ひ出した。

(四)

新太は、自働車に對して、勝利の感じばかりを持つてゐなかつた。

ずるぶん意地わるく、自働車の方で、新太の馬車の後から警笛を鳴らし

て、馬をわざと驚かしながら追ひ抜けて行くやうなこともあつたが、新太

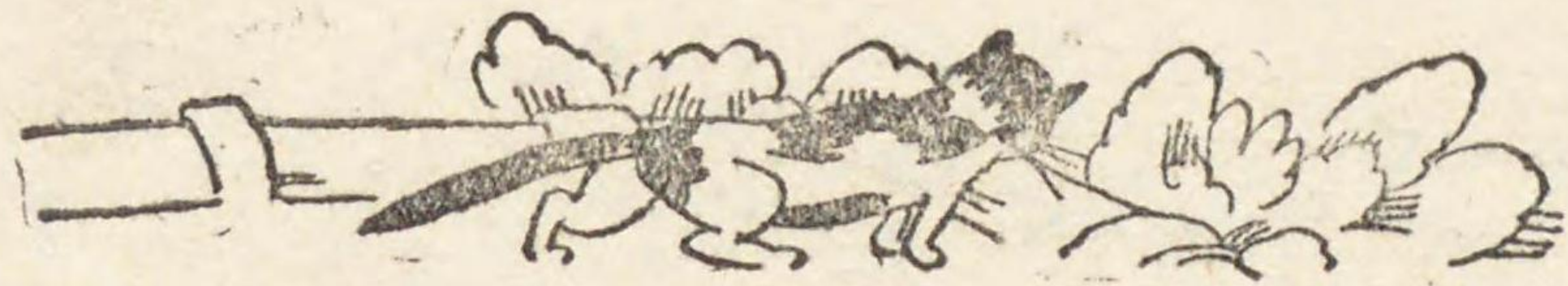
はいつもすなほに、道のわきへ馬の手綱を引いて片寄せた。

ある日、ちやうど山へさしかつたところで、自働車が溝に落ちたこと

があつた。

その時も、自働車が意地わるく、新太の馬車を追ひ抜いたために、そん





なことが起つたのであつたが、新太はけつして「ざまあ見ろ！」

といふやうな氣持にならなかつた。

彼は自分のことのやうに心配して、すぐに馬車をとめて、運転手を助けに行つた。

さいはひ溝は浅かつたので、運転手は投げ出されたが、怪我もしなかつた。自動車も、べつに傷みはしなかつた。新太の馬車にもお客はゐなかつたが、自動車にもお客はゐなかつた。

新太と運転手のほかに、この山にさしかかつた静かな場所に、人はゐないのであつた。

運転手は、新太のすなほな暖かい氣持を、しみじみと感じずにはゐられ

なかつた。

「よかつたなあ、おら、ほんとにたまげたよ。でも、怪我がなくて、よかつたよ……」

新太は、運転手のズボンの泥を、手で拂ひ落しながらいつた。

運転手は、自分のはね飛んでころがつた、醜い姿を思ひ浮べながら、それでも、こんな場合に、新太がすこしも侮らずに、やさしく心配してくれるのがありがたかつた。

もし位置をかへて、自分が新太の場合だつたら、「ざまあ見ろ！」

と思つて、そのまゝ溝に落ちた馬車を尻目にかけて、置いてきぼりにしたであらうことを考へて、胸のうちで深く耻ぢた。また、今まで新太の馬



車のことを「ガタクリ馬車」といつて侮つて来たことを思ひ出して耻ぢた。

「濟まなかつたな。おれがわるかつたよ、今まで、おめえと口一つきかなかつたんで……」

運轉手は、二十五六の若者であつたが、新太がなにくれとなく手を貸して、自働車の始末をしてゐる時、ふいに新太の手をとつてさういつた。

運轉手としては、いひにくい言葉であつたが、わるいと感じた今、すらすらと口をついて出た。そして、手を握りながら、頭をさげた。

「なあに、お禮なんかいはんでえゝだ。みんなお互ひつこだあ。」

新太は、その時も、ふつと旅人のことを思ひ出した。

人間と人間のふしぎなつながり、そして、どこにも悪い人間はゐないと



いふ感じが、新太の胸を動かした。

あゝ、その時、ほかにだれ一人、見てゐる者はなかつたが、昔ながらの山は、春の光のなかで、ぬくぬくと暖められながら、このよき場面を眺めてゐはしなかつたか？

また、青い青い空も——すぐそばに立つてゐる幹のくねつた松も——やはり、このよき場面を眺めてゐはしなかつたか？

新太は、しあはせな氣持で、今も稼いでゐる。父親は、新太に對して、危ながつてゐた氣持を、もう今では持つてゐなかつた。

父親もしあはせであつた。

をり／＼新太は、たくさんお客を乗せた日など、父親のために酒瓶を、駈者臺の下に入れて来た。





少年 駈者

酒瓶のなかには、黄金色の酒が、たぶたぶとをどつてゐた。新太はときどきその酒瓶を見ては、父親の喜ぶ顔を思ひ浮べるのであつた。父親の病氣も、この頃は大分いゝ方であつた。母親が生きてゐてくれたら——それだけが新太の心を淋しくした。

二四



九官鳥の歌

(一)

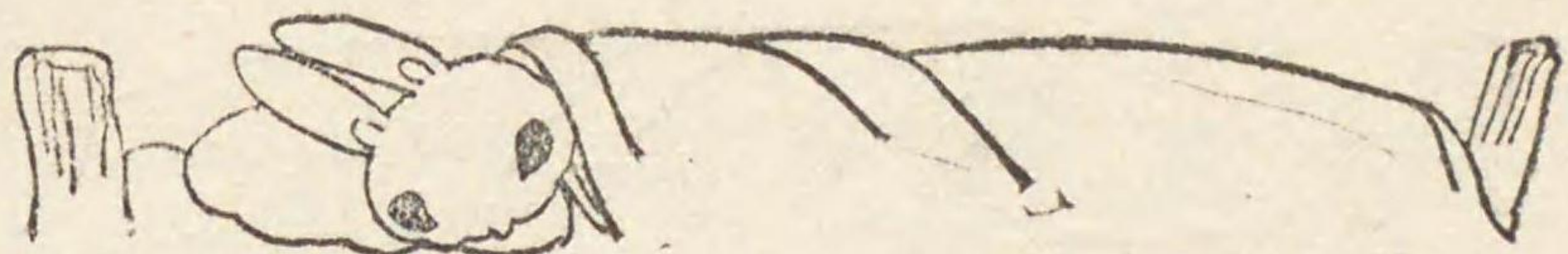
ある冬の夜のことでした。北京の城門に近い、支那貿易商「清和洋行」の狭い部屋で、支那服を着た少女が、古びた机によりかかつて、じつとも思ひに沈んでをりました。

電燈には藍色の支那笠がかかつてゐるので、ほの青いさびしい光が、少女の横顔を染めてゐました。そのせゐか、もの思ひに沈んでゐる少女の容子はなんとなく、悲しさうに見えました。

少女はごく粗末な支那服を着てゐました。髪はむざうさに束ねて、髪飾

九官鳥の歌

二五



り一つつけてゐませんでした。指輪と耳環も、はめてゐませんでした。だから、この「清和洋行」の女中であることは一目でわかります。だが——この少女は支那人ではないのです。傍へよつて、よくよく顔だちを見るならば、それはすぐにわかる筈です。きりりと締つた顔にどことなくやさしさがあります。殊に睫毛の長いつぶらな目が、日本人であることとを明らかに示してゐます。即ちその目こそ、愛と情に輝く清らかな日本人の目です。また、なんとなく犯し難い、凜としたところのある日本人の目です。

それにしても、この少女は、なぜこんなに考へ込であるのでせうか？少女の名は、安川照代といひました。両親といつしよに支那へ渡つて、かなり幸福に暮してゐましたが、父親が商賣に失敗し、おまけに母親は急



病でなくなり、昔に變るみぢめな身の上になつて終ひました。そして、父親はもう一度、この運命を切りひらくために、内地へ歸る事になりましたが、借金の抵當といふやうな意味で、氣の毒にも照代はこの「清和洋行」へ女中代りとして、たつた一人、残されることになつたのでした。

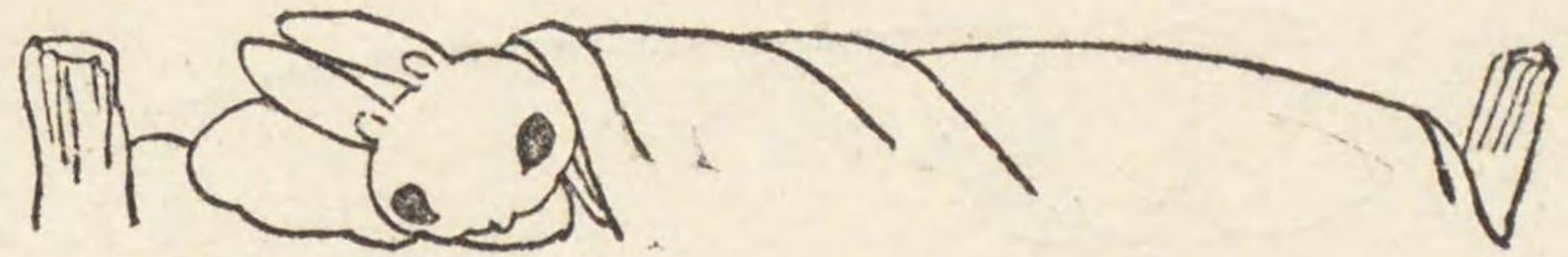


ですから、「清和洋行」で働いて、いろいろ辛いことがあつても、父親のことを思つては、じつと忍びに忍んでゐました。そして、いつも父親にいいことがあるやうにと、心から神に祈りを捧げてをりました。
 今も、寒い冬の夜、照代は父親のことを考へてゐたのです。

(二)

照代が父親のことを思ふと、いつも考へられて来るのは、日本内地のことでした。

支那人ばかりの間に使はれてゐると、しみじみ日本がこひしくなりました。五年前、支那へ来るまで、ずつと育つて来た東京のことが、走馬燈のやうに頭のなかで幻となつて、浮んだり消えたりしました。殆んど支那



語ばかり使つて、支那服を着て、まるで支那人のやうに暮してゐましたが、心にはいつも日本の思ひが溢れてゐました。

だが照代にとつて、たつた一つの慰めがありました。それは主人の小さい娘のために、一羽の九官鳥が飼つてありましたが、その九官鳥からなつかしい日本語を聞くことでありました。その日本語は、照代が教へたのです。主人の娘をお守しながら、支那語をいろいろ教へなければならぬのでしたけれど、なにしろ九官鳥は、毎日世話をしてもらふ照代に、いちばんなついてをりましたので、夕方、部屋のなかに入れてから、照代が教へる日本語を、なか／＼よく覚えるのでありました。

その夜、照代はいろいろ考へこんで、悲しくなりましたが、ふと、照代の頭のなかを、一つの思ひがとほりました。



「あゝ、さうだ。それがいいわ。」

さうつぶやいて、いつになく照代は晴れ晴れした顔をしました。と同時に、よりかかつてゐた古びた机から、照代は急に身を退いて立ちあがり、うれしそうに部屋のなかを、三べんほどまはりました。

その思ひつきとはなんでせう？

九官鳥に、「君が代」をうたはせることになりました。日本をなつかしむ照代の心が、それを思ひつかせたのでありました。

「毎日、すこしづつ覚えさせよう。それがいいわ。」

照代の心は、躍りあがりました。

その夜が明けて、次の日の仕事が済んで、夕方、九官鳥を部屋へ入れると、照代はさつそく「君が代」の練習にとりかかりました。

照代は「君が代」の最初のひとくさりを、なん度となくうたひましたが、うたつてゐるうちに、いつか感激の波に心を浸されて涙ぐんでしまひました。

九官鳥は、しみじみした聲で、照代がくり返す「君が代」の節に、じつと耳を傾けてゐました。そのうちに、だんだん興味を持ち出したやうでした。

この小さい音楽の先生は、毎日毎日けつして課業を怠りませんでした。同時に、注意深く、いつも部屋の扉を閉めて、誰からも覺られないやうに氣をつけました。それからまた、やたらに九官鳥が「君が代」をうたひ出さないやうに支那語で、

「一、二、三」



と、いふと、必らず「君が代」をうたふやうにしました。
 日本を思ふ、清らかな少女の心の、報いられる日が來ました。毎日の努
 力が積み重なつて、とうとう、九官鳥はうたひました。

「きみが……ようは……」

ちよに……やちよに……

さざれ……いしの……」

それから先は、支へてしまひましたが、それだけでもなみたいていなこ
 とではありませんでした。それだけにしろ、照代は充分に満足しました。

「一、二、三」

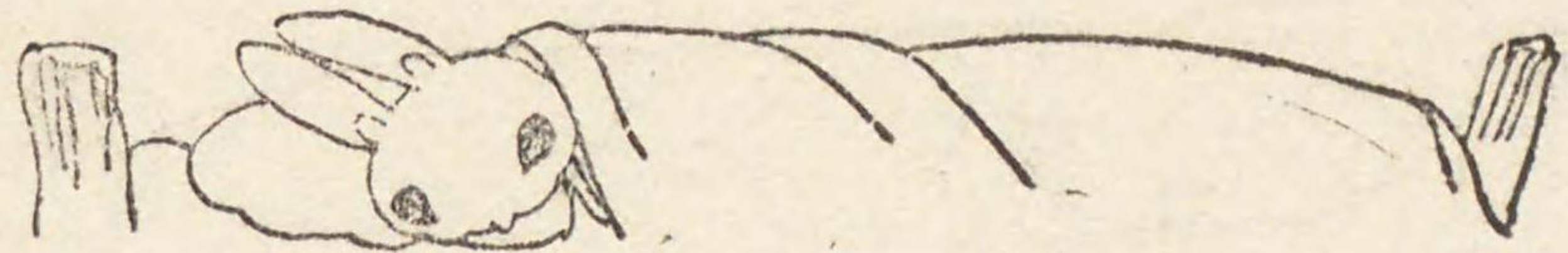
といひつけ、九官鳥がそこまでうたふと、照代の顔には、いつも優しい
 微笑が浮びました。そして、必らずなにか御馳走をやるのでした。



さあ、さうなると、照代はもう心弱く涙ぐむことはありませんでした。
 支那人の朋輩から口ぎたなくのしられても、店員の若い支那人に手荒な
 ことをされても、さては、主人から無法に叱られても、夕方になつて、た
 つた一人で部屋に入つて九官鳥の「君が代」を聞きさへすれば、いかなる
 侮辱をも堪へることが出來ました。そして、更にまた、
 「日本を守る神さまが、わたしの身を守つて下さる。」
 という信念が、固く固く照代の心をかためました。

(三)

北京の寒さも、すつかりゆるんで、うららかな春の光が、紅い招牌に照
 り榮えるやうになりました。



ある日「清和洋行」に、一人の日本人が尋ねて来ました。
なにか秘密の用件の客らしく、主人はその日本人を二階の部屋に案内しました。

その日本人といふのは、眉毛の濃い、目のぎよろつとした四十近い男で、たしかに一癖ありさうでした。長い間、その男は主人といつしよに話してゐました。

照代は、この男のことが妙に氣にかかりました。同じ日本人に逢ふなつかしさといふものが、すこしも心に起つて来ませんでした。

「變な人……」

照代は、二階へあがつて行くその男の後姿を見て、思はずつぶやきました。

そのうちに、主人の娘の帽子を、取りに行くために、二階へ行きました。が、ちやうど、隣の居間へ入つた時、

「日本なんかどうでもなれ、日本なんか必要ないんだ。」

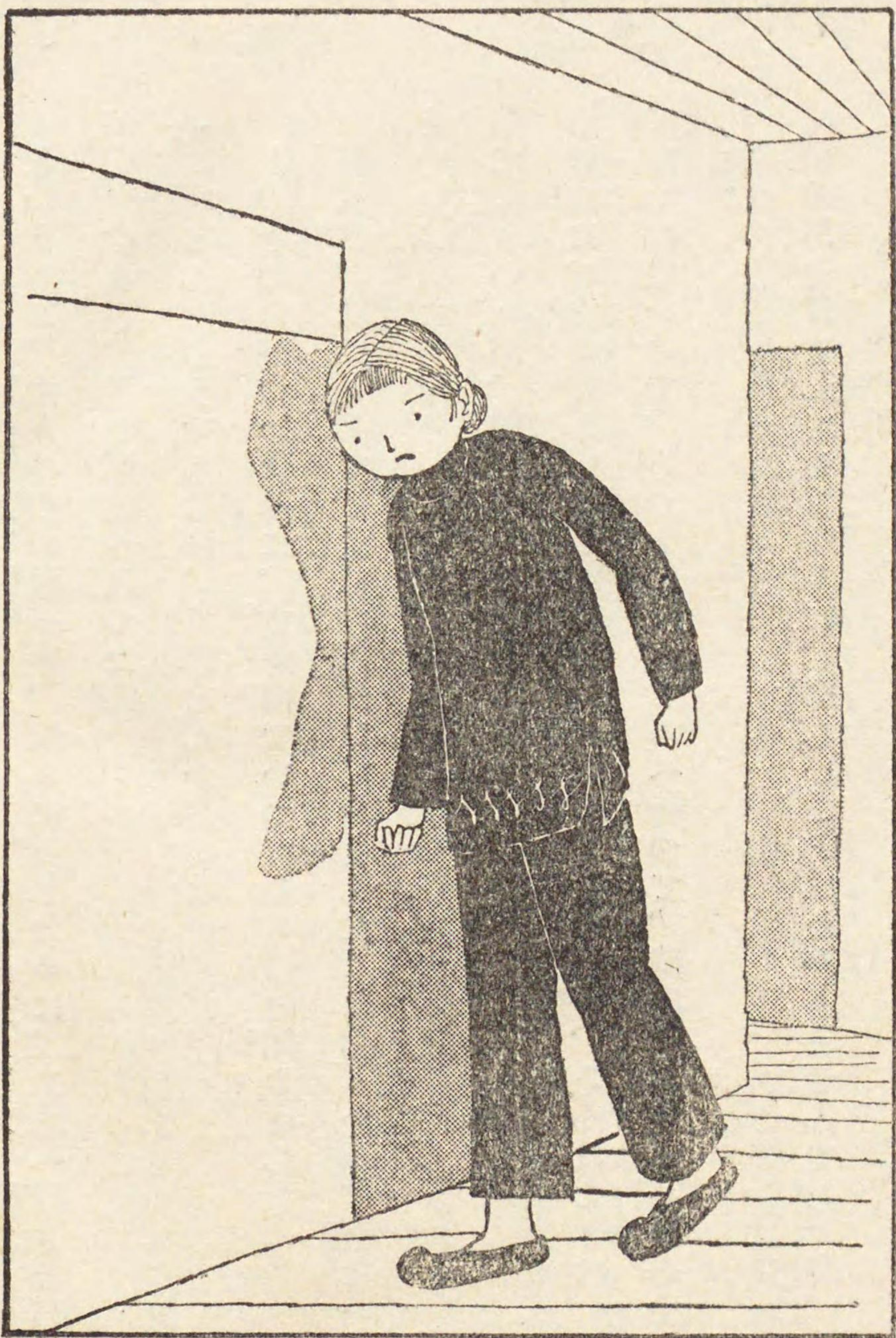
と、その男がつい聲高に、支那語でいつてゐるのを聞きました。

照代は、はつとして、思はず顔がほてりました。なんとといふ、情ないことをいふ人だらう！これが日本人の唇をついて出る言葉だらうか！やがて憤りの火が、照代の胸に燃えあがりました。

同時に、立ち聞きすることは悪いけれど、この場合、そんなことはいつてゐられないので、そつと扉のところへ行つて、隙間にじつと耳をあてました。

暫く耳を澄ましてゐるうちに、詳しいことはわかりませんでした。が、な



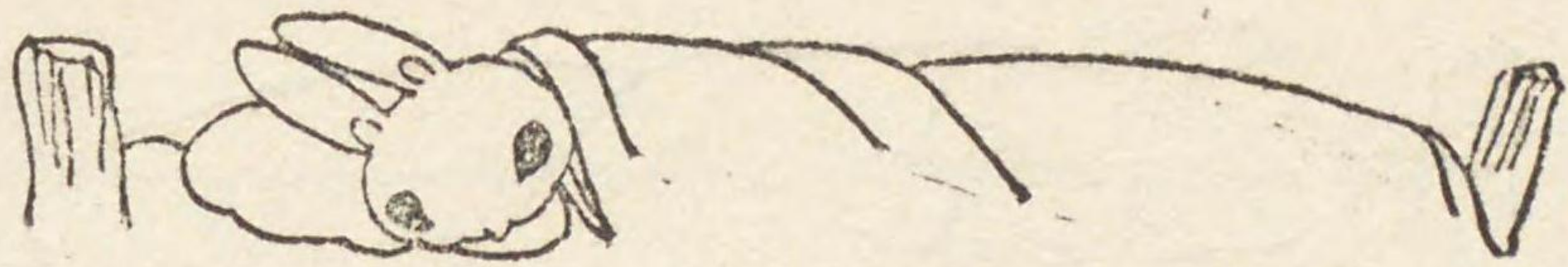


にか日本にっぽんにとって重要じゅうような書類しょるいを盗ぬすんで來きて、この主人しゅじんといつしよに力ちからを合あせて、それをどこかへ賣うりつけて、一儲まうけしようといふ相談さうだんのやうでし
た。

「あの人ひとは、支那語しなごを使つかつて、支那服しなふくを着きて、心こころまで支那人しなじんになつてゐる。わたしに力ちからがあつたら、どんなにしても、あの人ひとをやつつけるんだくれど……」

照代てるよは、足音あしおとをひそめて、二階にかいから降りて來きました。いつたんは怒いかりに燃もえたが、さて自分の力ちからといふことを考かんがへると、この場合ばあひどうしやうもないのでした。そして、浮うかぬ顔かほで、主人しゅじんの娘むすめに帽子ぼうしをかぶせると、そのま
ま手てを引ひいて、庭にはを歩あるきました。娘むすめがなにか話はなしかけても、照代てるよは力ちからのな
い返事へんじしかしませんでした。





だが、ふと照代は考へつききました。

「さうだ。わたしにできることがあつた。」

照代は、さつそく庭の隅へ行つて、亭の柱にかけてある九官鳥の籠をば
づしました。そして、その籠を主人とあの男が話してゐる二階の部屋の、
ちやうど真下の部屋の窓に吊しました。

「ね。どうぞ、わたしの心を届かして下さいね。」

照代は、心のなかで、九官鳥を拜むやうにして、

「一、二、三」

といふ、例のいひつけの懸け聲をかけました。

九官鳥は、こんな晝間、こんな晴やかな場所で「君が代」を唄へといつ
て命じられたので、却つてうれしかつたのか、大きな聲で、すぐにうたひ



出しました。

「きみが……ようは……」

「ちよに……やちよに……」

照代は、足早に主人の娘のそばに来て、それとなく二階の容子をうかが
つてゐました。

すると、果して、あの男は、開けつばなしになつてゐる窓から、いぶか
しさうな顔を出しました。

「おざれ……いしの……」

高音部の「いしの」といふあたりは九官鳥の咽喉は、さけるかと思ふく
らゐ、強く強く響きました。

窓から覗いてゐる男の顔は、氣のせゐるか、照代の目にはその時さつと曇

つたやうに思ひました。

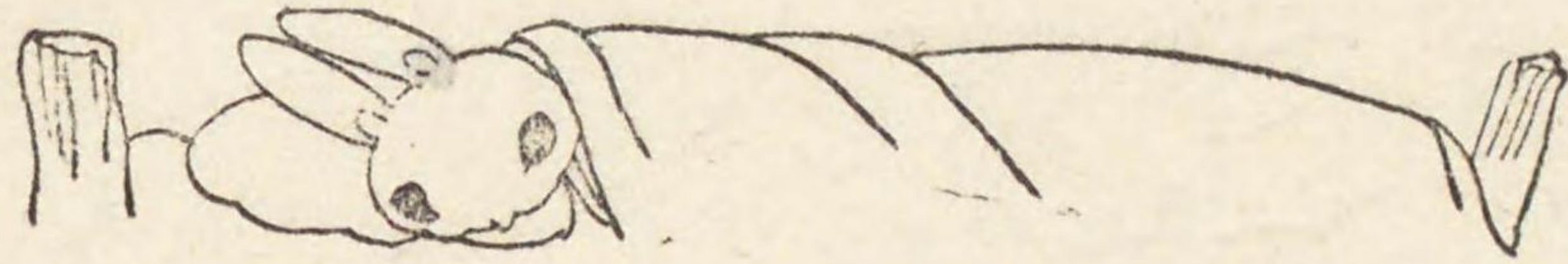
思ひがけないものを、思ひがけない時に聞いて、男の良心はさすがに目覚めたのではないでせうか？

(四)

さうでした。やつぱり「君が代」の節は、よごれかへつた心でも、それが日本人の心なら、清められずにはゐないのでせう。

暫くすると、その男は、主人に伴はれて庭に出て來ました。そして、照代のところへ歩いて來ると、いきなり照代の手を握りました。痛いほど、強く握りしめました。

「あんたが、鳥に習はせたんですね。あれでわたしの心が醒めたよ。鳥が

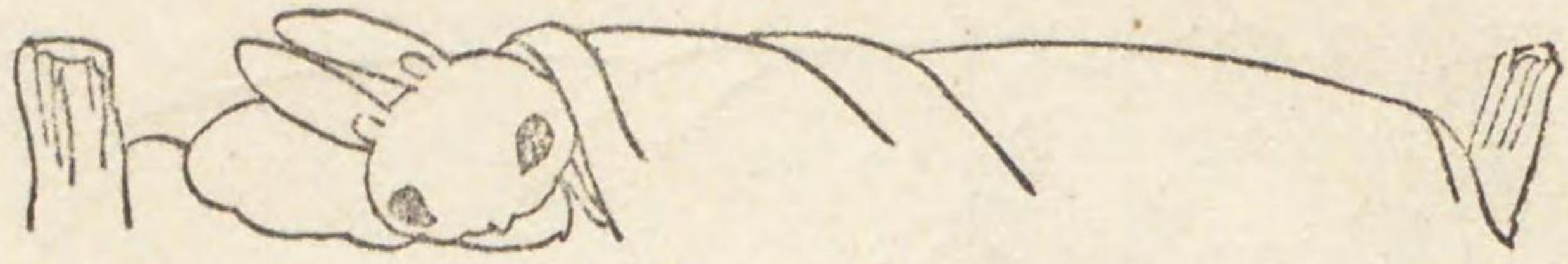


うたつてゐるので、わたしはよけい恥かしくなりました。あれを聞いていると自分ながらやつぱり日本人の血が流れてゐることがわかつた。ほんとに、わたしはばかだつた。」

照代は、久しぶりで聞く日本語のなつかしさを、然も、その日本語が今の自分にとつて、いちばんうれしい日本語であるのと、聞いてゐるうちに異常な感動に胸をとどろかせました。おさへやうとしても、涙がすんすん頬を傳はつて落ちました。

「をちさん、ごめんなさい、あたし二階へここのお嬢さんの帽子を取りに行つて、つい立ち聞きしたんですの。」

「いや、そんなことなんか、なんでもない。ごめんなさいといひたいのはこつちだよ。ね、憎んでも憎みたりないだらうが、どうか許しておくれ。」



その男の目にも涙が光つてみました。

照代は頭をたてに振つて、うなづきながら

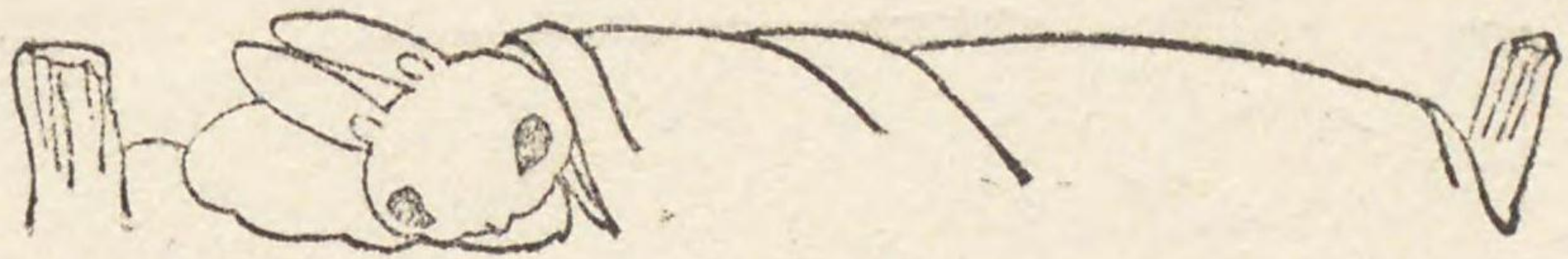
「をちさん、日本つて國は、いい國ね……」

といふのでした。

「ああ、いい國だ。ほんとにいい國だ。ありがたい國だ。今はつきりわか
つたよ。」

その男は、力強いひ放ちました。悪に強い人は、善にも強いといひま
すが、その男なぞもたしかにさうなのでせう。小さな照代に向つて、すつ
かり自分の悪かつたことを懺悔して、なほもくり返しくり返し詫びるの
でした。

「をちさん、そんなにいられると、わたし困りますわ……あゝさうそ、わ



たし九官鳥にお禮をいはなくちやならない。」

照代は小走りに走つて、九官鳥のところへ行つて、

「ありがたう。よくうたつてくれたわね。」

といひながら、人間に向つてするやうに、頭をさげました。

主人は、娘の頭を撫でながら、今まで二人の容子を不思議さうに眺めて
おりましたが、やがてまたその男と話し初めました。けれど最後にその男は
きつぱりといひました。

「なにかもやめですよ。」

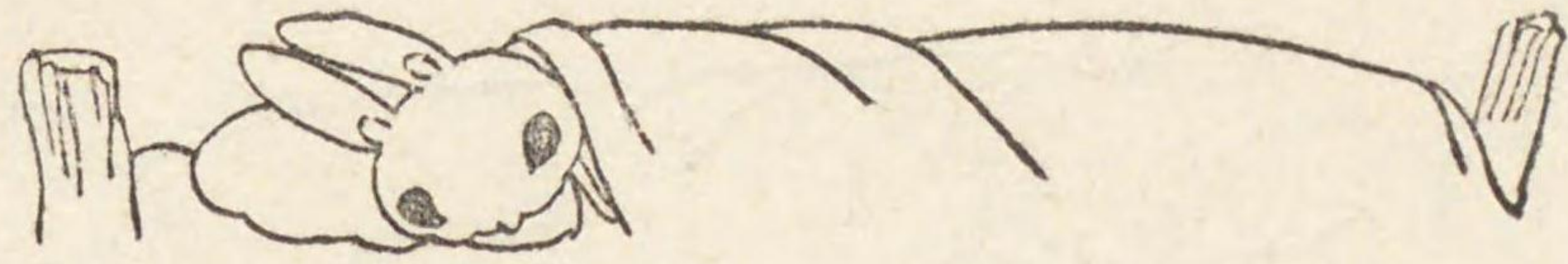
照代には、その支那語が、すしりと置かれた重い鐵のやうに、力強く耳
に響きました。



(五)

照代は、二三日してから、この「清和洋行」から暇を取りました。そして日本から、再び来る父親を、楽しく待つのでありました。さういふふうになつたのは、例の男が照代のことを北京にゐる日本人たちに話したので、みんながお錢を出し合つて、照代にはさつそく暇を取らせ、呼び迎へることにしたからでした。

九官鳥は照代が「清和洋行」の主人から、譲つて貰ふことになりました。たぶん、今でも上手に「君が代」をうたつてゐる筈です。そして、みんなからかはいがられてゐる筈です。



眠りを盗む

(一)

どうしたわけか、殿様はちつとも眠れませんでした。もう眠れない夜がざつと五十日のうへもつゞきました。だから、殿様が明け暮れぐせのやうに、

「眠りたい、眠りたい。」

と、まるでだだつ子のやうに、いひつゞけてゐたのも、無理のないことではありません。

殿様に仕へてゐた醫者たちは、もちろん御病氣にちがひないと思つて、





眠りを盗む

代る代る、お身體を診察しま
したけれど、そして、お薬
をとりかへひきかへ、こし
らへましたけれど、てんで
そんなお薬はききませんで
した。もうこの頃では、首
をひねつて、腕を組んで、
溜息をつきながら、おたが
ひに顔を見あはせてゐるばか
りでありました。

仕方がないので、占者を呼び迎へま



四六



した。まじなひもしました。神様
や佛様にも願をかけました。け
れど、どれもこれも、ちつとも
効目がありませんでした。

家老をはじめ、家臣たちは、がつ
かりしてしまひました。も
はや、どうしやうもありま
せんでした。

それに、なにしろお寢
間といへば、厚い壁で圍んだ静
かな部屋で、眠りを妨げるどんな小さな物音

眠りを盗む



四七

だつて、洩れて来ないやうに、わざわざ作つたのです、夜具はといへば、やはらかな春風のやうな肌ざはりの、ふつくらとした白い絹の蒲團ですから、このうへ殿様の眠りを誘ふやうにする方法も、まづないわけでありました。

「困つたもんだ。然し、なんとか方法がないものかしら？」

家臣たちは寄ると觸ると、ただもう困つた困つたのいひつくらでした。かうなると、まつたくのところ、よく眠る乞食の方が、眠れないで苦しむ殿様よりも、どんなにしあはせだか知れないのでした。きたない蓆にくるまつて、軒下にちぢこまつてゐても、たゞ安らかに眠ることができさへすれば、どんなに氣持がいくでせう。

殿様もそんなことを考へたとみえて、殿様なぞとあがめられるよりも、



眠れた方がよつぽどいと、こぼしたりすることもをりありました。

ほんとに、眠れない辛さといふことは、経験したことのない人には、とても察することはできないでせう。胸はどきどきするし、瞼は妙に重し、眼の奥は痛むし、なんとなく身體がだるくて力がない。たつた一晚ぐらゐる眠れなくてもさうなのに、それが、なにしろ五十日のうへもつゞいたといふのですから、殿様は見るかげもなく、げつそりとやつれて、肉はすつかり落ちてしまふし、骨はつつばるやうに見え透くし、皮はしなびて色艶がなくなるといふ、ひどく衰れた姿になつてしまひました。

(二)

ある日のことです。





殿様はやうやくと枕から頭をもたげて、見るともなく窓のそとを見ました。

小春日和の明るい光が、ちくちくと眼にしみて、涙が出て仕方がありません。だから、殿様はわざと眼を細くして、明るい光を避けるやうにして、外を見なくてはなりませんでした。

窓からは晴れた青空も見えました。日を受けて光つてゐる、森や林も見えました。静かに澄んでゐるお堀も見えました。けれど、殿様の心は、さうした美しい景色を見ても、ちつとも軽くはなりませんでした。

「だめだ。だめだ。眠れなくてはこまる。ぐつすり眠つて、そのうへで、かうした静かな景色を眺めたら、いい氣持にもなれやうが、眠れないで眺めるんぢや、かへつて、いらいらしてしやうがない。」



殿様は溜息をつきながら、そんなふうになかで繰り言をいふのでした。

その時、ふと殿様の眼をひくものがありました。それは、お堀の岸にぎゆつと翼をたたんで、さも氣持よさうに眠つてゐる數羽の白い水鳥でありました。殿様はうらやましうな顔つきをして、ちつとそれを眺めてゐました。

けれど、殿様はちつと眺めてゐるうちに、どんなにしても、自分だけは眠れないのだと考へると、もう眺めるのが苦しくなりました。もう頭をもたげてゐることも、堪へられなくなつて、ばつたりと枕のうへに顔を落して、子供のやうな聲をだして泣いてしまひました。

情ない、はかない氣持が、胸いつばいに溢れたからであります。けれど



枕の皮が涙にぐつしより濡れた頃、殿様の頭のなかに、矢のやうにすつと一つの考へがとほり過ぎました。殿様は急に嬉しくなつて、

「さうだ、さうだ。それがいゝ。」

と呟きながら、寢床のそばにかゝつてゐる銀の鐘を黒檀のほそい撞木で、あわてゝたたきました。

さほど高い鐘の音でもないので、耳をそばだてて控へてゐた家老がさつそく聞きつけて、足音をたてないやうに、心を配りながら、そつと入つて來ました。

「なにか御用でございますか？」

「うん、大急ぎだ。用事といふのはな、水鳥の眠りを盗んで來てほしいのだ。」と窓の方に瘠せた手をさしのべて、「あのお堀の岸に眠つてゐる水鳥の



眠りだ。いゝか。誰でもいい、盗んで來た者には、たくさん褒美をとらせるぞ。わしは、水鳥の眠りによつて、ぐつすり眠らうと思つてゐるのだ。だが、もしもお前たちに盗めなかつたら、さつそく布告をだして國中へ知らせるがいゝ。水鳥の眠りを盗むことのできる者が、一人や二人ゐないことはあるまい。」

「はい、かしこまりました。」

そんなことが、とてもできる筈のものではないことは、知れきつたことではありましたが、家老はさう答へるより仕方がありませんでした。けれどなかなかむづかしいことです。家老は眉をひそめずにはゐられませんでした。

(三)

一日、二日、やがて十日も過ぎてしまひました。けれど、家來たちは、もちろん、國中のものには、そんなことはできませんでした。きつと盗んで來るといつて、勇みたつてでかけた者もありましたけれど、眠つた水鳥のそばに行けば、かんじんの水鳥は目をさましてしまひました。

殿様は水鳥の眠りを盗んで來さへすれば、わけもなく安らかに眠れるものと思つて、待ちこがれてゐましたので、十日も過ぎたのに、誰にも盗めなかつたと聞くと、たいそう腹をたててしまひました。

「ばかな奴らだ。戸も閉つてはゐないし、鍵もかかつてはゐないではないか。なんとといふ腐甲斐ない奴らだ。やすやす盗んで來られる筈ぢやないか。」



か。」

家老はまつ青な顔をして震へあがりました。

なるほど、戸も閉つてはゐないし、鍵もかかつてはゐませんが、水鳥の眠りが盗めやう筈のないのはわかりきつたことです。ですから家老は心ななかでは、ばかばかりかと思はずにはゐられませんでした。けれど、まさかこの場合、ただ青くなつて震へあがつただけで、引つこめるわけのものではないので、

「まつたくでございます。戸も鍵もあるわけではありませんから、なんとかして盗ましてみませう。どうかもう三日だけお待ち下さいませ。」

「では、もう三日だけ待つてやる。けれど三日のうちに盗めなかつたら、



切腹を申しつけるぞ。いゝか。」

家老はいよいよ青くなつて震へあがりました。

三日だけ待つていたたくやうにいつたものの、てんで、盗める見當はつかないのですから、三日たてば、生きてゐられないのだと考へて、ひどく悲しくなつてしまひました。

だから、家老が、

「はい、承知いたしました。」

といった聲が、いやに悲しさうな震へ聲だつたのは、いふまでもないこととす。

けれど、捨てる神あれば、助ける神ありとでもいふのでせうか、家老がしほしほと、殿様のお寢間からさがつて來ると、あわたしく小姓がやつ



て來て。

「水鳥の眠りを、これまでにたびたび盗んだことがあるといふ男が、訪ねてまゐつてをります。おかに家老様にお眼にかゝつて御相談申しあげたいと申してをります。」

と、とりついたのでした。

それを聞いた家老は、飛びあがるほどに喜びました。

「おゝ、さうか、さうか、さつそくその男に會つてみよう。」
と、家老は、晴れやかな聲でいひました。

(四)

家老はその男に會ひました。家老は、この男ならきつと水鳥の眠りが盗



眠りを盗む

めるにちがひないと、心強く思ひました。といふのは、見るからにその男は伶俐さうに、ぎろりと光つた眼をしてゐたからです。

「わたしには、水鳥の眠りを盗むことなんか、ごくわけのないことでございます。

けれど、知つていらつしやるとほり、これは誰にでも盗めるものでもありませんから、御褒美はたんまりいたしませんと……」

家老はその男に、しまひまでいはせませんでした。



「やるとも、やるとも、なんなりとお前の望みしただい。」
それを聞いて、男はにつと笑ひました。

「ありがたうございます。ではかうお願いいたしたいのでございます。わたしが首尾よく水鳥の夢を盗んで来て

それでもつて殿様が眠つておしまひになつたら、今度お眼が覺めるまで、わたしを殿様にし

ていたゞきたいのでございます。つまり、その皆さまが殿様に向つてなさんと同じやうに、わたしにしていた

だきたいのでございます。なにしろわたしは卑し



眠りを盗む

い者で、殿様といふものがどんなものか、もちろんちつとも知りませんので、ちよいとその三日天下とでも申しませうか。せひとも殿様になつてみたいと思ひまして……」

「なるほど、それも面白からう、首尾よくゆけば、そのくらゐのことは、褒美としてもよささうだ。」

「ありがたうございます。では、これからすぐに、盗みに行つてまゐります。」

その男は、さつそく出かけて行きました。しばらくして歸つて來た時には、片手をぎゅつと握つて、いかにもなにか大切なものを握つてゐるやうに、胸のあたりにしつかりとあてがつてゐました。

家老の前へ來ると、その男はいひました。



「盗んでまゐりました。」

「さうか、それは御苦勞だつた。」

家老は大急ぎで、その男を殿様の前につれて行きました。

「申しあげます。三日間といふお言葉でございましたが、いゝあんばいに今日盗むことができました。ここにをります男が、ぎゅつと握つてをりますのが、水鳥の眠りでございます。」

「御苦勞、御苦勞、ではすぐにそれを貰つて、久しぶりにぐつすり眠るとしよう。」

殿様はとても喜んでゐました。

「では、お鼻の穴から、この眠りを押しこむことにいたします。」

男はさういひながら、殿様の枕もとにじり寄つて、手をすこしづゝ開





けながら、握つてゐるものを鼻の穴から押しこみました。
なるほど、見るまに殿様は眼をつぶつてしまひました。深い深い眠りに
落ちたらしく、身動きもしなければ、いびきもかきません。なんてまあ、
安らかなことだつたでせう。それを見ると、男はにやにや笑ひながら、家
老の顔を見ました。その笑ひには、
「いかがです。偉いでせう。」
といはぬばかりの誇らしさがありました。

(五)

さて、その男は、約束どほり殿様になりました。殿様のお召物を着て、
殿様のお部屋に入つて、肩をそびやかしてみると、すてきに愉快でした。



ほんとの殿様みたいに、その男はいろいろ振舞つてみました。家老をはじ
め、家臣たちが、おとなしくいひつけどほりにするのが、おもしろくてし
やうがありません。そのために、ひどく我まゝ勝手にしました。食べもの
だつて、やれ南の國の魚がほしいとか、北の國の獸がほしいとか、いろん
な注文をだしました。
かうして、三日過ぎましたが、ほんとの殿様は、いつかうお眼が覺めま
せんでした。眠りを妨げてはならぬといふので、お寢間は固く閉め切つた
ままになつてゐました。
家老は心配になつて來たので、そのことを例の男に訊ねてみました。
「なあに、心配しなくてもいい。五十日のうへも眠れなかつたのだから、
五十日ぐらゐ眠りつづけるのはあたりまへぢやないか。」



と、殿様ぶつたいひ方でいふので、それもさうだと思つて、もうそのうへ家老は言葉返しませんでした。

けれど、五日たち、六日たち、とうとう十日たつうちに、例の男の我まは、ますますひどくなりました。さすがに、家老をはじめ、家臣たちも我慢することができなくなりました。

「あの男を怒らして、殿様のお眠りを覺ましてはいけないと思つたからこそ、かうしてあの男にも従つて來たが、いくらなんでも、あんまりつけあがるわい。もう十日にもなるんだから、あの男を殺して、殿様のお眠りを覺ました方がよささうだ。どんなものだらうか？」

家老がみんなに向つて、さういつて相談すると、みんなもそれがよろしいでせうと答へました。それで、とうとうその男をある晩そつと殺してし



まひました。

ところが、家老が殿様を起さうと思つて、殿様のお寢間を開けてみるといやな匂ひがふんと鼻をつきました。驚いて殿様のそばへ行つて、ゆすぶり起さうとしますと、あるまいことか、殿様はとつくに死んでゐました。水鳥の眠りだといつて、殿様の鼻へ押しこんだのは、あれは毒葉だつたなと、家老はすぐに氣がつかしました。まんまと欺されたので、くやしくてなりませんでした。

「でも、悪智慧を働かして、うまうまと殿様の代りをしたが、きつと初めの考へは、四五日ぐらゐで逃げだすつもりだつたのであらう。けれど、殿様の死んだことを、みんなが氣がつかないのをいいことにして、我まをやり過ぎたから、殺されてしまつたのだが、まあまあ逃げ出さないうちに



眠りを盗む

仇を討つてよかつた。」

家老はさう考へて、いくらかほつとしました。



春浅い頃

(一)

「カニの奴、生意氣だなあ。」

太郎はびかびか光る目廂をつまんで、學校帽をぐつとあみだにかぶりなほしていひました。

「うん。」

五六人の仲間が、うなづきました。

「カニの奴、ひでえ目に合せてやるべ。あいつを海へつれ出して、うめえ工合に海へ落してやるべ。」

春浅い頃



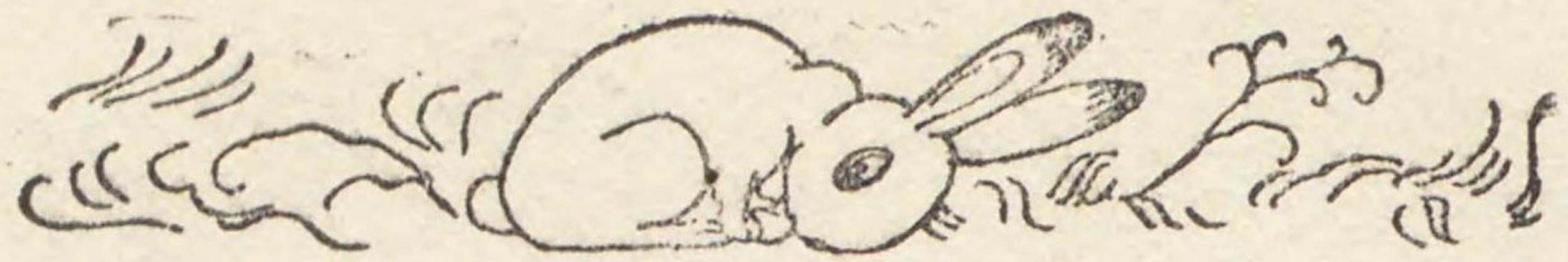
「うん。」

やはり、みんなはうなづきました。

学校の歸りがけです。道からちよつとそれた崖のうへに、五人ばかりの仲間を集めて、太郎は一つのたくらみをいひ出したのでありました。

太郎といふのは、漁師の網元の子供で、帽子をかぶり、袴をはいてゐました。この小さな漁師町では、一番のお金持の子供でした。ほかの五人はみんな漁師の子供で、帽子や袴どころか、着物はつぎだらけで、よこれ返つたのを着てをりました。

ですから太郎は姿からいつても、王さまです。然も、色は白く身體はほつそりしてゐるので、おのづから王さまらしい品格が、そなはつてゐるといつていいでせう。たゞ、漁師町で育つたために、いくら網元の子供で



も、言葉だけは頗る王さまには不似合です。

「おら、だげんど、こはいな。カニは強いから、あとでひでえ目に合ふかも知れねえだ。」

一人の子供が、後で復讐されることをおそれて、逃げ腰になりました。

「ばか！ 弱虫！ こはけりや、やめろよ。そのかはり、おめえともう遊ばねえぞ。」

太郎は唯一の武器であるおどかしを、ちよいと用ひます。すると、わけなくその子供は、じぶんの言葉をひるがへします。

「おら、こはかねえよ。」

「よし、しつかりやらなきやだめだぞ。」

太郎はじぶんの言葉が、すぐ通つたので、満足らしいほほゑみを、顔に



春 淺い 頃

うかべます。

今、太郎にい

ひつけられてゐ

る子供たちは、

てんでに太郎に

一目おいてゐま

す。つまり、こ

の子供たちの父

親は、太郎の家

のおかげで、働

いてゐるやうなものでありました。



七〇



春 淺い 頃

太郎がみんなにいひつけて、いたづらをさせようと
してゐるカニといふのは、兼吉といふ子供のあだ名で
した。

太郎は兼吉に對して、快く思つてゐません。

それは、今までずつと一年から五年まで、太郎

が一ばんであつたのに、六年になつてから、兼

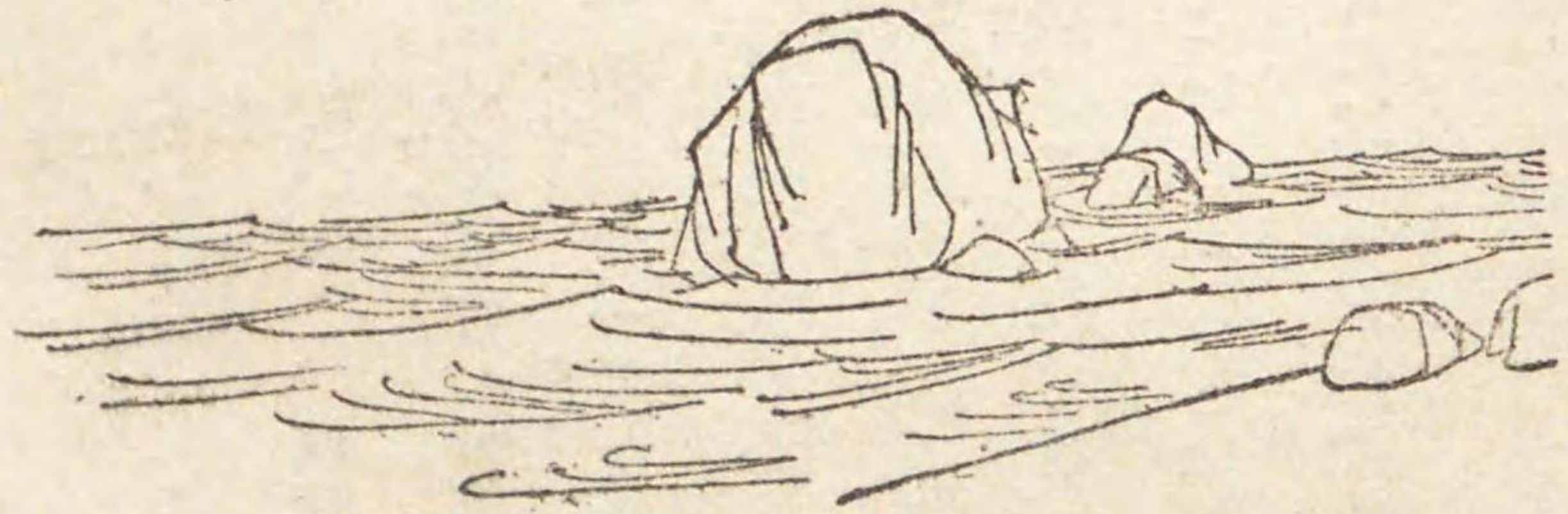
吉が一番になつたからでした。

もつとも、六年になつてからは、初めて新らしく來

た山田先生に教はつたのでしたが、この山田先生は師

範學校を出ると、じぶんから進んでこんな片田舎の小

學校へ來たほどの變り者で、ほかの先生と比べると、



七一



親爺の息子くらの年が若かつたのです。

ほかの年とつた先生たちは、太郎を特別扱ひにしてゐましたが、この山田先生ばかりは、太郎とほかの子供たちと、すこしもちがひなく、公平な態度をとりました。従つて、一學期も二學期も、太郎は一番になれなかつたのでした。特別にあまい點を、太郎につけない限り、兼吉が一番になるのは當然であつたのでした。

けれど、太郎としてみれば、兼吉みたいな奴に、一番をとられたことが癢にさはつてならないのです。じぶんが今まで、特別扱ひにされてゐたことは棚にあげて、兼吉が山田先生のお氣に入りだなぞといひふらしたりするのでした。そして、兼吉は一番になつてから、偉さうにするとか、生意氣だとか、そんなこともいひふらしました。



さうした妬み心が、遂に兼吉を海へ落さうといふくらみになつたのでありました。それも、手下を使つて、わざとらしくなく、海へつき落さうといふのでありました。

(二)

その日の夕方、兼吉はまんまと、太郎のたくらみにかかつてしまひました。

わりに暖かい小春日和ではありましたが、海の水は凍えるほど冷たかつたのでした。

兼吉は、太郎のたくらみを氣づくとき、口惜しくてたまりませんでした。岩からつき飛ばされて、やつと這ひ上つた時、兼吉の顔は寒さのために色



を失つてをりました。そして、膝から血がにじんできました。

太郎をはじめ、手下の子供たちは、蜘蛛の子を散らすやうに逃げてしまつて、兼吉を海から引きあげようともしませんでした。

「おめえが、わるいんだぞ。おら知らねえぞ。」

と、いつた太郎の言葉は、その際としては、あまりにひどいと思ひました。兼吉は、しつとり濡れたまゝ、痛い足をひきづつて家へ歸りながら、つい口惜し涙をこぼしました。父親にいへば、むろん我慢しろといふにちがひありません。網元の息子であるが故に、しかへしをすることができないといふことは、考へても腹のたつことでした。兼吉は胸がむしやくしやして、なほさら口惜しくなりました。

然も、兼吉には、今着てゐる着物のほかに、一枚の綿入れもありません



ん。兼吉は洗ひざらした單衣ものを出して、それをひつかけたまま、爐で濡れた着物を、乾かしたのでありました。兼吉が、太郎のことを考へながら、着物を乾かしてゐると、とめどなく涙が溢れて來ました。

けれど、ふと兼吉の目に、山田先生の顔が浮びました。兼吉は涙の霧を通して、その幻にじつと見入りました。すると、幻の山田先生は、兼吉を慰めるやうに、につこりと笑つたのでありました。そして、

「いいよ、なんにも考へるなよ。わたしにはなにもかもわかつてゐるんだからな。」

と、やさしくさす言葉を、聞いてゐるやうな氣持がするのです。兼吉はすうつと胸が、軽くなるやうな氣がしました。

着物はなかなか、乾きませんでした。そのうちに、日が暮れてしまひま



した。

「兼、なにしてるだあ。」

母親は、この漁師町のはづれにある、小さな罐詰工場に働いてゐるの
でしたが、歸つて來るとさつそくさう聲をかけました。

薄暗いなかで、浴衣を着て爐ばたにうづくまつてゐる兼吉の姿を見て、
いぶかしく思つたのでありました。

「あゝ、おつ母か。お歸り。遊んでてな、岩から落ちたのよ。おれもばか
したよ。」

「うそだ。だれかにつき落されたんだべ。」

兼吉は、びつくりして、母親の顔をふり返りました。
「さうぢやねえだ。」



兼吉は、ありのまゝを話すことは、母親を悲しみますと思つて、さうい
たのでありました。

けれど、母親は、日頃から網元の息子に、兼吉が妬まれてゐることを知
つてゐました。それに、いくら足をはづしたにしても、すつぶり着物が濡
れてしまふことは、あり得ないことでありました。母親は、兼吉が着物を
すつかり爐の上にかざして、乾かしてゐるのを見て、すぐにをかしいと思
つたのでありました。

「なあ、兼、人間は貧乏ぢやつまらねえな。學問をして、うんと錢を儲け
るとええだあ。」

兼吉は、母親のその言葉で、もう母親が網元の太郎のしたことだと、察
してゐるのを知りました。



やつと、
涙が
出なく
なつたところ

ろなのに、また、涙が目ににじ
んで来ました。けれど、

「海へ落ちても、乾いた
綿入れがないからなあ。」

と、太郎のことはやは

りはずに、まるでべつなことを
いひました。



(三)

兼吉は、六年を卒業する時も、一番になりたいと思つて勉強しました。

太郎のたくらみのために、海へ落ちたことなんか、もう忘れてをりました。

ある雨の晩、急に風が出て、嵐になりました。濱の漁師たちは、みんな
遠くの海へ行つてゐました。老人や女や子供は、心配しはじめました。も
ちろん、今夜は歸つて来るはずはないのですが、遠くの海でひどい嵐に、
會つてゐなければいゝがと、それを心配したのでありました。

ところが、急に村の鐘が鳴りました。難破を知らせる非常の合圖です。
みんなは、この暗闇のなかを濱邊へと集りました。そして濱邊でさつそく



焚火をはじめました。雨にも消えずに、火はさかんに燃えました。人々の心配さうな顔を、その火影が照らし出しました。

鐘はますます烈しく鳴ります。人々は腹の底から聲をしぼつて、

「おおい、おおい。」

と叫びつづけました。救助船を出すこともできません、若い者はそつくり、遠い海の漁場へ出て行つてゐます。ただ、さうやつて、難破しかかつてゐる船のために、力をつけてやることしかできないのでした。

兼吉も、濱へ出ました。出て見ると、驚いたことには、沖で困つてゐるその船は、網元の家の小船で都から来た親類の書生さんが二人と、太郎と都合三人で、夕方から夜釣に出かけたら、嵐に會つたといふのでありました。

「若い者がゐなくてしやうがねえな。助け船を出しても、助け船がまた難儀するぞ。」

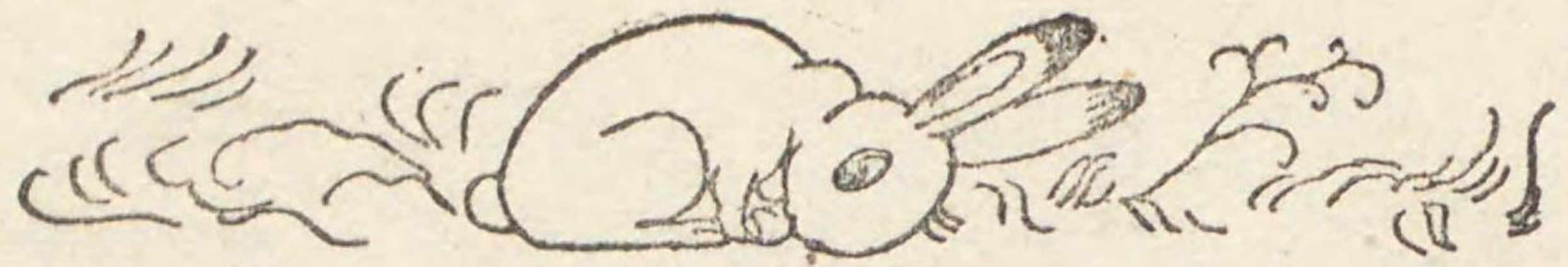
「困つたこと起つたぢやねえか。なんちゆうことだべな。」

老人や女たちは、じぶんたちの息子、またはじぶんたちの夫が、遠い海の漁場で、やはり難儀してゐやしないのかと思ふと、ひとごととは思はれません。濱には悲しい騒ぎが、いつまでもつづくのでありました。

だがその時一艘の小船が、みんなのゐるところから、かなり離れたあたりから海へ出ました。

「だれが出しただあ。あの船見ろや。」

一人が氣づいたのです。みんなは、すぐにその小船の方へ急ぎました。人々がその小船がおりたあたりに來た時には、小船はかなり沖へ出てゐま





した。
 もう仕方がありません。たゞ濱で焚いてゐる焚火を、うんと焚いて、沖を照すほかはないのです。
 だが、小船で出た人は、じぶんの腕が達者でないことを知つて、ちやんと綱を用意してゐました。つまり、海岸の太い松の幹に、かたく綱のはじを結んで、それを頼りに綱をのびしながら、沖へ出たのであります。そして難破しかつてゐる船の三人を、こちらの船にのせて、今度は綱を引きながら、岸へ歸つて来ようといふわけでありました。
 十分、二十分、三十分……
 難破しかつてゐる船から、三人をこちらの小船にのせました。やがて小船は嵐のなかを、綱を頼りに岸へ近づかうとしてゐます。その容子を知



つて、人々はみんなしてその綱を曳きました。
 そして、とうとう、小船は岸に近よりました。焚火の光で見ると、助けに行つたのは、山田先生と兼吉であることがわかりました。網元の家族はどんなに喜んだでせう。二人の書生と太郎をいたはると同時に、山田先生と兼吉に向つて、あらんかぎりの感謝を捧げるのであります。
 「兼吉さんは、太郎さんをせひ助けたいといふために、一生懸命でね。はたで見ても涙の出るほど働きましたよ。」
 山田先生は、兼吉をほめてゐました。
 けれど兼吉は、山田先生のことをかういひました。
 「おら、山田先生が、じぶんの教へてゐる子供が、死にかかつてゐるのにかうしちやゐられんといはれたから、せひとも助けべえと思つただあ。」



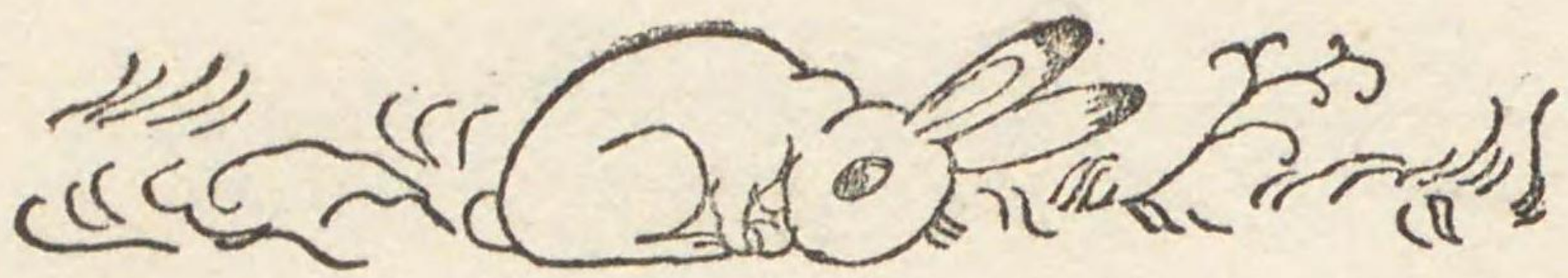
三日の後、いいあんばいに、この漁師たちは、遠い海で嵐にも會はず無事に歸つて來ました。そのお祝ひの時山田先生と兼吉とは、みんなから海の勇者としてほめられてられました。網元の家からは二人にりつばな贈りものをしました。

けれども二人ともあくまでその贈りものを拒んで、

「こんなには、喜んでいただいたら、それで充分ぢやありませんか。」

といったことは、更に二人を偉大にしました。

太郎だけは、じぶんが親類の従兄たちと、夜釣に出かけたことを後悔してゐました。それは、つまり山田先生と、兼吉とを偉大にさしてやつたやうなものだと考へて、ひどく口惜しがつたためでした。あんなに大騒ぎしなかつたで、大丈夫、岸へつけたのに、網元の家の人に乗つてゐるといふ



だけのことで、みんなが大騒ぎしたことも、口惜しくてなりませんでした。

太郎は、うはべだけは、二人にお禮をいひましたが、いつまでも、心は平らではありませんでした。殊に、兼吉に對して、頭があらがない位置になつたことが、考へるにつけて、口惜しかつたのでありました。

「兼吉が死にさうな目に會つたら、おれが助けてやるだ。」

と考へた太郎は、いつか兼吉を、死にさうな目に合ふやうにしたいものだ、たくらみはじめるのであります。

春はまだ浅く、今年梅もおくれるといふうはさでした。太郎が、兼吉に對して、心から、へりくだることのできる日は、いつ來るでせうか。でも、そんなことを知らずに、兼吉は勉強してゐます。

燕と大根

(一)

六さんの口癖はかうです。

「世の中で、いちばんたしかなものには自分に頼るつてことさ。神さまだとか、佛さまなんてものは、自分の力に頼ることのできない弱い奴のろくでない呆言さ。」

その六さん、近頃はめつきり年をとつて、眼はしよぼしよぼするし、手はぶるぶる震へて来るし、どうやら腰もすこし曲りかけたやうでした。でも六さん。相變らず氣だけは強くて、ほかの老人たちが、神さまや佛さ



まのことを、ありがたさうに話し合つてゐたりすると、いつでもふふんと鼻先でせせら笑つてゐました。

「六さんも、元氣ないお爺さんだが、神さまや佛さまの悪口をいふのは困るて。」

六さんの御主人は、なにかにつけてさういひました。御主人は六さんの忠實な働きぶりに感心して、身よりのない六さんが死ぬまで、氣持よく世話をするつもりでゐました。けれど、神さまや佛さまの悪口をいふことだけは、どう思ひなほしてみても、氣持が悪くてたまりませんでした。

ある小春日の日でした。御主人は町のお寺の和尚さんのところへ、燕を届けて貰ひたいと、六さんに向つて頼みました。





六さんは大嫌ひな和尚さんのところへ、自分が丹精して作った燕を届けるといふことは、無精に腹だたいしいことでしたが、御主人のいひつけに、けつして反くやうな六さんではありませんでした。素直に裏に出て行つてその朝、畑からとつて来てあつたまつ白い燕を、七つばかり持つて来ました。

六さんはそれを籠へ入れて、肩へかつぎあげると、

「ぢや旦那、行つて來ますせ。」

と、それだけで、濟ませばいゝものを、

「この燕をなまぐさ坊主に届けるのは、ちつともつたいないなあ、旦那。」

と、ついまたいつもの悪口が唇をついて出ました。

「まあ、そんなこといはずに、六さん頼んだよ。急ぐこともないから、ぶ



らぶら届けてくるさ。」

御主人は、また始めた、ちよいと眉をしかめました、わざとあたりさはりのないことをいつておきました。

六さんは、白い光つた街道を、ぶらりぶらりと、町の方へ行きました。空は思ひきり青く晴れて、うららかな日光が、降りそそいでゐました。そよりと吹く風もないので、すこし歩くと、脊中がぼかぼかとして来て、うつすらと汗ばむくらゐでした。藪かげで咲いてゐる椿の赤い花も、けふはひとしほ鮮やかでした。

六さんは、ものうく、けだるく、すてきない氣持になりました。お寺の和尚さんに燕を届けるといふ、腹だたい氣持なんかも、とうに失くなつてゐました。



(二)

六さんの御主人の息子の康さんは、あることを思ひつきました。

町へ行く時には、きつと六さんが、町はづれの居酒屋へ寄るのを知つてゐましたので、康さんは大根を七本風呂敷に包んで六さんの行つた道を通らずに、別な道をさきまはりをしました。そして、居酒屋へ寄つて休みながら、六さんの来るのを、今か今かと待ちかまへてゐました。

やがて、六さんは、やつて来ました。案の定、居酒屋へ入つて来て、冷酒をおいしさうにぐびりぐびりと飲んで、

「いいお元氣だ、ちつと居眠りでもして行かう。」
といひながら、日向に出て腰をおろしました。そして、すぐにこくり



こくり居眠りをはじめました。

康さんは、六さんに氣づかれないやうに、ものかげに隠れてゐましたが、六さんが居眠りをはじめたのを見ると、にや／＼と笑ひながら、籠のなかの燕を出して、その代りに自分の持つて来た大根を入れました。もちろん、六さんが氣のつく筈はありません。居眠りから覺めて、大きな欠伸を二つばかりして、お寺をさして出かけました。

「今日は、御主人さまのいひつけで、燕を持つてあがりました。」
六さんは、お寺へ行つて和尚さんに會つて、さういひました。

「あゝ御苦勞さまだね。なんでも今年はずばらしく燕のできがいいといふ話で、こないだ御主人が下さるといつておいでちやつたから、楽しみにしてゐましたぢや。」





和尚さんは、六さんが肩からおろした籠の蓋を、眼を輝かさして開けました。

するとまあ！ 燕は入つてゐないで、大根が入つてゐるぢやありませんか。

和尚さんは、それでも長い燕のかしらと思つて、

「えらい長い燕ぢやな、まるで大根みたいぢや。」

と六さんにむかつていふでもなく、半ばひとりごとのやうに、いひました。

六さんは顔の汗を、腰にはさんでた手拭をぬいて拭いてゐましたが、

「長い燕？」

と、あわてていひながら、和尚さんの、手に握られた白いものに眼をそ



そぎました。それはたしかに大根でした。

「ひよんなことがあるものだ。たしかに燕を持つて来たになあ。」

六さんは眼をくりくりさせました。

(三)

「まあ、えゝわ。大根だつて燕の兄弟みたいなものぢやから、ありがたく戴いておかうわい。」

正直で頑固な六さんはすぐに、その言葉を遮ぎつて、

「そりやいけません、御主人さまは、燕を持つて行けと、おつしやいましたから、もう一度出なほして來ます。」

と、いひました。そして、その大根をまた籠のなかに入れて、肩へかつ



いでかへつて來ました。

六さんは、お寺を出てからといふもの、時々立ち止まつて、御苦労さまにも肩にかついだ籠をおろして、なかを開けてみました。

「たしかに大根だ。」

と、開けたたんびに繰り返していひました。

やがて、例の居酒屋のところまで來ると、康さんが店の前に立つて、にやにや笑つてゐました。

「六さん、お使ひかね。」

「まあ、若旦那ですか。」

と、六さんはいひました。

「ちよいとお寺までお使ひに行つたんですよ。ところがふしぎなことがあ

るものですね。籠のなかへ燕を入れて持つて行つたのに、向ふで開けたら大根になつてましたせ。」

康さんはわざと、

「そんな馬鹿な話があるもんぢやないよ。」

と、いひましたが、をかしくつてたまりませんでした。

六さんは、眞顔になつて、なほそのふしぎを話さうとしました。

康さんは、

「わしがおごるから、酒を飲みながら話すがいい。」

と、いつて、六さんを居酒屋のなかへつれこみました。

六さんはぐびりぐびりと、また酒を飲みはじめました。すると、酒の方に氣をとられてゐる六さんの隙をねらつて、康さんはまた籠のなかの大根





を燕とすり變へておきました。

やがて、六さんは籠をかついで一人で歸つて行きました。

康さんは、六さんの後姿を見送りながら、くすくす笑つてゐました。

(四)

「旦那、とてもふしぎなことがあるものですね。燕を持つて行つたのに、いつの間にか大根に變つてゐました。」

六さんは、歸ると御主人に向つて、眼を丸くしていひました。

「馬鹿な、そんなことがあるものかい。」

「いや。まつたくですよ。ほうら……」

と、いひながら六さんは肩にかついでゐた籠をおろして、蓋を開けまし



た。

「なにが大根だね、燕ぢやないか。りつばな燕ぢやないか。」

「おやつ！」

六さんは、開いた口がふさがりませんでした。

「どうしたんだい、六さん！ 六さんもおいぼれたなあ。神さまや佛さま

の悪口をあんまりいつたからだせ。」

「をかしい！」

と、六さんは首をかしげて考へこみました。

「お寺を出る時には、たしかに大根だつたのに。」

六さんは、いくら考へても、ふしぎでたまりませんでした。御主人から

神さまや佛さまの悪口を、あんまりいつたからだといはれたことが、今日



に限つて妙に頭にしみこみました。いや、殊によつたら、さうかも知れないと、六さんは思ひました。

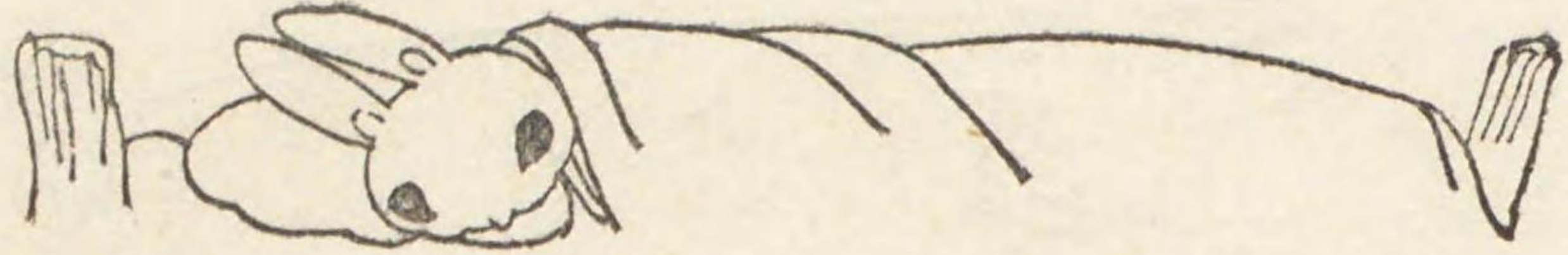
御主人は、六さんがおいはれたのだとばかり思つてゐましたが、息子の康さんが歸つて来て、すつかり話を聞いた時に、笑ひながらいひました。

「なかなか面白い思ひつきだつた。あれで六さんも、自分に頼るのがあやふやになつたらうし、もう神さまや佛さまの悪口もいふまいよ。」

康さんも笑ひながらいひました。

「六さんは正直で、人のいい爺さんですから、却つてだましやすいですね。」

なるほど、その後、六さんは神さまや佛さまの悪口を、すつかりいはなくなりました。

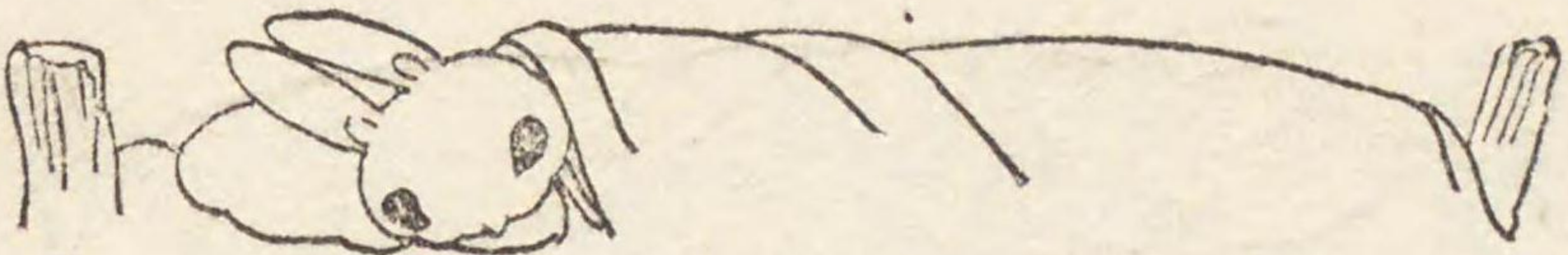


小さな贈り物

(一)

大きな風呂敷包みをお喉は背中にしよつてゐました。それは、たいへん重くて、歩くにつれて、だんだん下へすりこけて行きました。そして、その度に重みがぐいぐいと、肩に食ひこんで行きました。お喉は顔を眞赤にしながら、胸のところでは結んだ風呂敷の結び目を、両手で引つぱりました。前かがみになつて歩くので、しせんに息が切れるのでありました。

けれど、お喉は一生懸命に、歩いて行きました。藁靴の下では、雪がきしきしと、音をたててきしみました。今はもう背中にはんのりと汗さへ出



て来ました。そして、熱くなつた頬を、冷い風が吹き過ぎるのが、却つて快よく思はれました。

「もう、ちよつとだ！」

お咲は、自分で自分に勇氣をつけました。どこかで休みたいと思ふ心を、絶えず叱りつづけて道を急ぎました。

お咲の背中の風呂敷包みはなんでせう？ それは藁草履が入つてゐるのです。お咲はその藁草履を、たつた一人の母親といつしよに、爐端に坐つて、暗いランプの光の下で、毎晩夜業に作つたのでした。

この夏、父親が死んでしまつてから、お咲の家はすんすん貧乏になつて来ました。去年の冬は、お咲も夜業などしないでもいいのでした。爐端で雑誌などに読み耽つてゐられる身分でした。けれど、今年の冬は、學校へ通

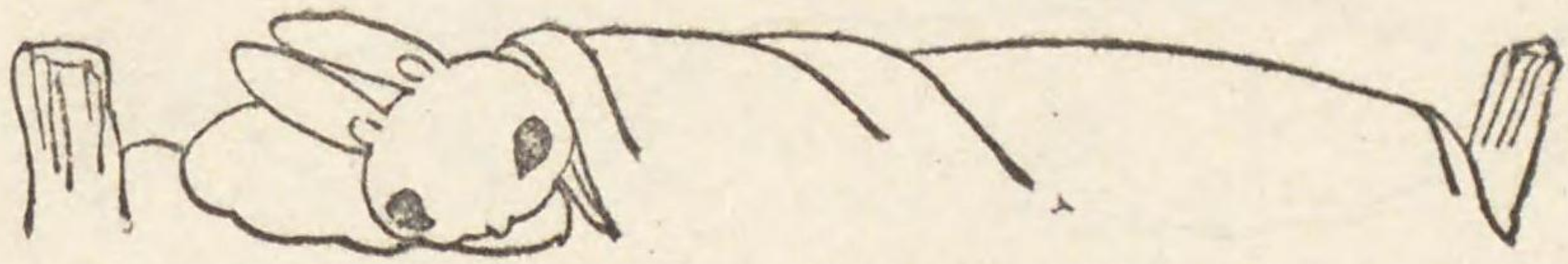


はしてもらふのが、よくよくのことで、夜はおそくまで、夜業をしなければなりません。

その夜業の收穫を、お咲は風呂敷包みにして、町の間屋へ賣りに行くところなのであります。そして、もう今日は暮の三十日、歸りには、そのお錢で正月のお餅を買つて來なければなりません。

お咲の心は、ただ町へ町へとはずんでゐました。そして、包みはどんなに重くとも、一刻も早く町へ辿り着きたいのであります。

けれど、鎮守の森を出て、爪先あがりの坂道にかかると、さすがにお咲は、背中の包みの重みのために、後へ引き戻されさうになり、危ふく足をすべらして、倒れさうになりました。お咲の額からは、汗が落ちて來ました。そして、はあはあと、大きな息をつきました。



けれど、お咲は堪へました。

その時、母親の顔が浮んだからでありました。めつきり頬のこけた母親の顔が……。

母親は？ 母親は二三日前から風邪氣で、だが、暮の忙がしい時に、寢こんでゐるわけにもゆかず、手傳ひのために働きに行つてゐるのでした。きつと、苦しいのを堪へて、働いてゐるにちがひないと思ふと、お咲の身體には新しい勇氣が充ち溢れました。

(二)

しばらく行くと、二人の子供が、風呂敷包みを、てんでに提げてゐるのが目にうつりました。お咲は、誰かしら？ と思つて、ちつと目を凝らし

ました。

「健ちゃんに、お波ちゃんかな？……」

お咲はさう思ひました。つゞいて、二人の持つてゐる風呂敷包みが、な

んであるか、たいてい察しがつきました。「きつと、松尾先生のところへ行くんだらうに……」

お咲はちつと眉をくもらせました。

そのうちに、お咲はせつせと歩いたので、二人に追ひつきました。なるほど、健ちゃんとお波ちゃんでした。健ちゃんは、五年の男生、お波ちゃんや五年の女生で、従兄妹になつてゐましたから、そんな時、いつも二人で連れ立って行きました。

健ちゃんは、背後に雪のきしむ足音を聞いたので、振り返りました。そ



して、そこに、大きな風呂敷包みを背負ったお咲を見て、すぐに声をかけました。

「やあ、お咲ちゃん！ どこへ行く？」

「町まで行くの……あんた方は、松尾先生のところけえ？」

「うん……これ持つて行くだ。」

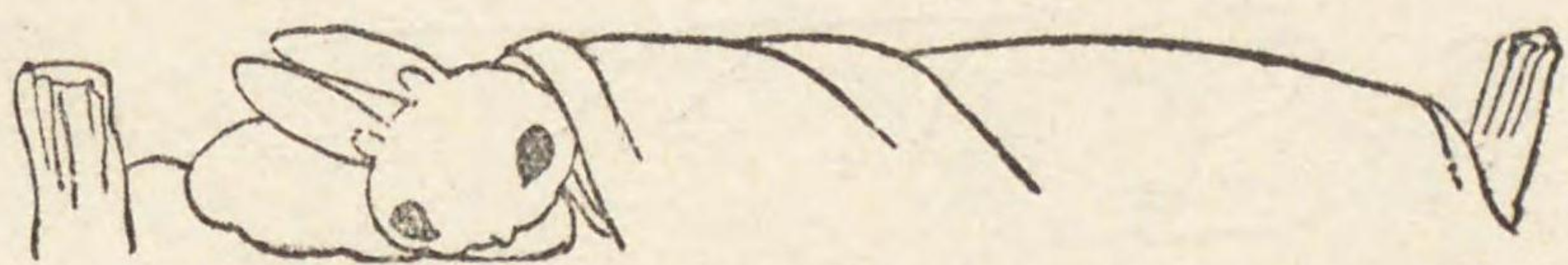
健ちゃんは、手に持った風呂敷包みを、ちよつと持ちあげて見せました。

「お咲ちゃんは、まだ持つて行かんの？」

お波ちゃんが、横から口を出しました。

「ああ……」

お咲は、なんだか悲しくなりました。



「いつ持つて行くの？」

「今から町へ行つてな……いつたん家へ歸つて、それから……」

お咲は、うつ向いたまま、やつとこれだけいひました。すんすん胸のなかに、悲しいものがあふれたからでした。

健ちゃんと、お波ちゃんが手に提げてゐる風呂敷包みのなかには、お餅が入つてゐるのです。丸いお供餅です。

いつも年の暮に、受持の先生のところへ、お禮を兼ねてお供餅を持つて行くのが、このあたりの習慣でありました。

その代り、新年に入つてから、先生はきつと生徒たちを招んで、おいしいお汁粉をこしらへてゐて下すつて、一日、みんなとおもしろく遊んで下さるのでした。



お咲は、去年の暮には、みんなと同じやうに、お供餅を持って行きましたけれど、今年、先生のところへ、持って行けるかどうか、それさへもまだわからないのでした。

町からいつたん歸つて、それから持つて行くとは答へたものの、背中の風呂敷包みの草履が、思ふやうな値段に賣れなければ、とてもお供餅なんぞ買へさうにありません。母親とたつた二人で祝ふお雑煮の、のし餅が、やつと一枚買へるくらゐのものでした。そのことが、お咲を悲しくさせたのでありました。

(三)

岐れ道のところへ來ると、お咲は二人に向つて、

「さよなら。」

といつたまま、ずんずん町の方へ行く道を行きました。

「後でお咲ちゃんが來ると、先生にいつておいたるぞ。」

お咲の胸のなかの、悲しみを知らない健ちゃん、大きな聲でさういひました。

「ああ……」

お咲は返事をしましたが、それは小さな微かな聲で、おまけに震へを帯びてゐました。相變らず悲しいものが、胸にあふれてゐたためでありました。

それでも、町へ行つて、草履を賣ることを考へると、お咲はいくらか胸が軽くなるのでした。早く荷をおろして……お錢を受け取つて……と考へ

ることは、今のお咲にとつて、楽しみでありました。ただ、そのことばかり考へて、強ひて健ちゃんやお波ちゃんのことを忘れるやうにして、お咲は足を早めました。

母親から教へられた問屋の店に、やつと着いた時、お咲はものもいはずに、風呂敷の結び目をほどいて、背中の荷物を土間におろしました。

それから、

「今日は……」

といひました。

障子を開けて、若い番頭が顔を出しました。

「草履を持つて来ましたで……」

お咲は、おづおづしながらいひました。



「相場は安いでな……」

番頭はさういひながら、風呂敷包みをちらりと見ました。

お咲は、黙つて、風呂敷包みをほどいて、草履をいくくりづつ取りあげて番頭の足もとに積みました。

「いくら持つて来た？」

「百二十足ありますで……」

番頭は、そこに積みあげる傍から勘定をしました。そして、勘定を済ますと、大きな木の錢箱から五十錢玉を出して来て、

「落さないやうに持つて行きな。」

と、いつて、それをお咲の小さな手へ渡しました。

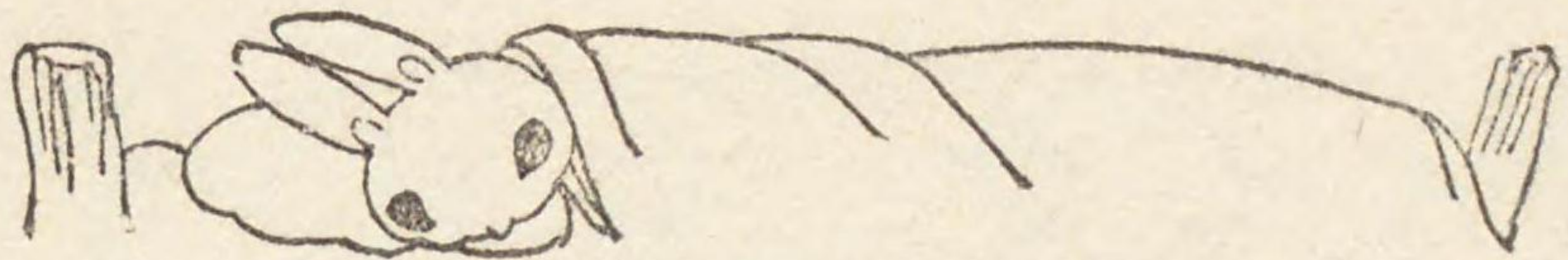
お咲は、安い相場だと思つてがっかりしましたが、白い五十錢銀貨を見



ると、ぺこんとお辭儀をしました。それから、風呂敷をたたむと、小脇にかかへて外へ出ました。

賑やかな通りへ来ると、お咲は目を丸くしながら、あたりの年の暮らしい容子を眺めました。もう門松も立ち、賣り出しのビラや旗が、風にはためいてゐました。そして、買物包みを持った人たちが、たくさん通つてゐました。

お咲は、母親から頼まれた白いネルの布を買ひました。一尺十五錢のを二尺買ひました。そして、その残りでお餅を買ふのでした。けれど、のし餅を一枚買ふことが出来ないで、四角く切つた切餅を買ふことにしました。そして、松尾先生のところへ持つて行くために、小さいお供餅もいっしよに買はうと思ひました。



「切飾を九つと……このお供餅を一つおくれな。」

お菓子屋の店さきに、切餅が並んで、金二錢の札のついてゐるのを見ると、お咲はさつそくさういひました。小さな小さな、一口に食べてしまへさうなお供餅も、やつぱり二錢だつたので、お咲はちやんと心のなかで、勘定をしてゐたのでありました。

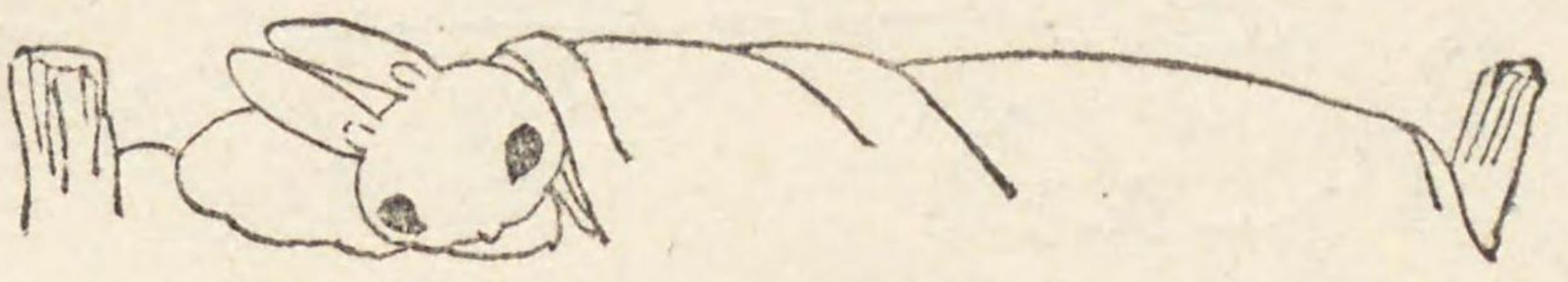
「はい、ありがたうさま……」

おかみさんが、それだけを包んでくれました。出来たと見えて、新聞紙の袋を持つと、やはらかな餅の感じが、手にあたりました。

「みんなは大きなお供餅を持つて行くけど、あたしはこれでいい……来年はもつとたくさん夜業をして、大きいのを持つて行かう……」

お咲は、あんまりお供餅が小さいので、ちよつと淋しくなりましたが、





すぐにあきらめました。
 おもちや屋の店の前をとほつた時には、去年、父親といつしよに買物に
 来た時のことも、思ひ出されました。その時は、一尺ほどの人形を買つて
 貰つたのでした。でも、今年……は人形どころか、餅さへもわづか九つし
 か買へない……と思ふと、つい藁靴をはいた足も重く、なにかに取りすが
 つて、思ひ切り泣きたいやうな氣持になるのですが、それをもうすぐにあ
 きらめて、お咲はずんずん町を出て、雪の路を急ぎました。

(四)

その夜、松尾先生の玄關で、
 「今晚は、今晚は……」

と低く呼ぶ聲がしました。その聲は遠慮勝ちでした。

「やあ、お咲ちゃんか。」

先生はお咲が肩をすぼめて、立つてゐるのを見てさういひました。

お咲は手のなかに、白い紙包みを持つてゐました。

「先生、健ちゃんとお波ちゃんは、もう歸りましたか？」

「うん、つい今し方まで遊んで行つたよ。お前が来るから、待つてゐると

いつてゐたつけが……」

お咲は、二人がゐないといふことを聞いて、いくらかほつとしたやうに
 見えました。

「先生、あの……これ持つて来ました……これつきり持つて来られません
 でした……先生、ごめんなさい、今年、家ではお餅がつけませんでし



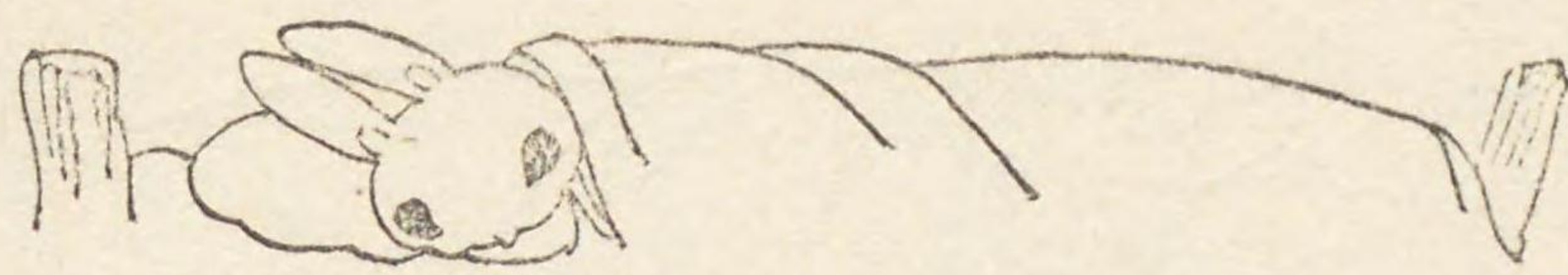
た。來年はわたし、夜業をたくさんして、もつと大きいのを持つて來ます。」

先生は、なにかお咲が、ひどく興奮してゐるらしいので、ちよつとふしぎに思ひながら、すぐにそれを開けました。

すると、そこには神様にお供する、さしわたし、一寸ぐらゐな小さなお供餅が包んであつて、うす暗い玄關のなかで、白々と先生の目を射ました。

「まあ、お咲ちゃん！なんて、やさしいことを……」

先生はお咲の家が、去年に比べて、ずつと悪くなつてゐることを、よく知つてをりました。父親のゐない貧乏なお咲に、こんな心配をさせたかと思ふと、いちらしくていちらしくて……胸をしめつけられるやうな氣持に



なりました。

「先生、健ちゃんのお波ちゃんのもの、大きなお供餅でしたね……」

それを聞くと、先生は目に涙を浮べて、
「先生は小さくとも、お咲ちゃんのお供餅がうれしいよ……だつて、お咲ちゃん、自分で働いたお錢で、買つて來てくれたのだからね……」

といひました。

「來年は、たくさん夜業をして、もつと大きいのを持つて來ます……」

「ありがたう、ありがたう……先生はお供餅を、お咲ちゃんから貰はうと思はないよ。その志しだけでけつこう……」

さういつて、いきなり先生は、お咲を引き寄せて、ぐつと抱きしめました。お咲は先生の廣い胸に顔を押しあててゐますと、涙がじんわりと湧い



て来ました。

その時、夜風が玄關の戸をはたはたと打ちました。先生は、急に気がついていひました。

「あ、寒いから、あがつて炬燵に入つて行くといいんだけど、家で忙しいんだらうねえ？」

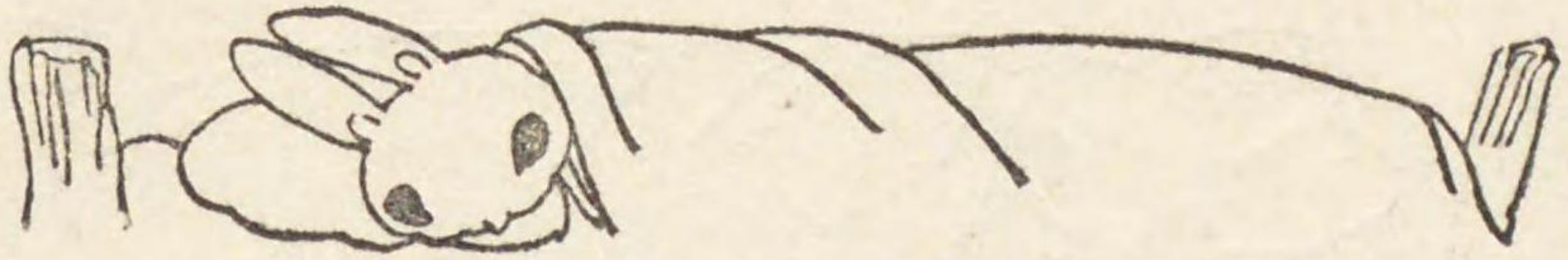
「ええ……新年になつたら、ゆつくりあがります。」

「さうか、それぢや、いい歳をおとり、三日には、たくさんお汁粉を作つて待つてゐるからね……」

「はい……では先生、さよなら。」

「あ、さようなら、風邪をひかないやうにね。」

お咲は玄關を出て、一人で歸つて行きました。先生は暗然とした氣持で



その後影を、いつまでも見送つてゐましたが、やがて、先生は戸を閉めて家のなかへ入ると、机の前に坐つて、お咲の持つて来てくれた、お供餅をちつと燈の下で眺めました。

清らかなお咲の氣持が、凝りかたまつて、このお供餅が出来あがつてゐるやうに思はれました。たらたらと、また先生の頬に涙が傳はりました。



順禮の願ひ

(一)

むかし、信濃の國の信濃川のほとりに、梁瀬といふ渡し守が住んでゐました。おかみさんとの間に、一人の男の子があつて、都合三人で貧しい暮らしをしてをりました。

渡し守は、生れつき正直で、深切で、信心ぶかい人でした。殊にこの人は、渡し子といふ自分の仕事、世の中の多くの人のためになる貴い仕事であると、深く信じてゐましたから、てんで貧乏のことなどを、心にかけてゐませんでした。暮しにさへさしつかへなければ、渡し錢なんぞ取りた



くないときへ思つてゐたくらゐでした。

ですから、朝は早くから、夜はおそくまで、この人は渡し船を漕ぎました。日に焼けた黒い遅ましい胸をはだけて、ぐつと兩足を踏んばつて、そのふとい兩腕で櫓を押す姿のなんてまあ男らしくつたことせう。

すこしぐらゐる川波が立つ荒模様の日でも、乗り合つた人々は、この姿を見ると安心して川を渡ることが出来ました。

また、さうして櫓を押してゐる時、恐らくは自分の仕事の愉快さに、ついほゝるむせむせでせう。その太い眉の荒くれた顔が、いかにも優しく人々の眼にうつりました。

ですから、人々は渡し船から降りる時、「いゝ若者だなあ。」





と、口くちにこそいはないでも、心こころのうちに繰くり返かへすのでありました。そして、二文もんの渡しわたし錢せんを三文張もんはりこむとか、または五文張もんはりこむかして、「ちつとばかりだが、取とつといてくんねえ。」といひながら、渡し守もりの大きな手てのなかに、ちやらくと落おとすのでした。「いけませんよ。多くつちや濟すまねえ、お返かへししますべえ。」そんな時とき、かういつて、定きまつた渡しわたし錢せんしかどうしても取とらないので、人ひとはなほも感かん心しんせずにはゐられませんでした。夜よるおそくなつて、人ひと通りも絶たえると、船ふねを岸きしにつないで、小屋こやでくつろぎますが、もしも急きふな用事ようじで川かはを渡わたりたいといふ人ひとがあれば、すこしもいやな顔かほをせず、渡わたしてやるのは毎度まいどのことでした。こんなふうでしたから、この渡し守もりの評判ひやうはんは、この地方ちほうでたいそうよか



つたのは、申まうすまでもありません。」

(二)

ある初冬しよとうのうすら寒さむい日ひ、老人らうじんの順禮じゆんらいが、この川岸かはぎしをとぼとぼ歩あるいて來きました。やがて渡し場わたばへ來ると、寒さむさうに肩かたをすぼめながら、渡し船わたぶねに乗りまし。た。そして、船縁ふなべりにぐつたり身みをもたせかけて、川風かはかぜを厭いとふやうにかがんでゐました。

船ふねのなかには、もう五六人ひんとくの人々ひとが乗のつてゐましたので、渡し守もりはこの順禮じゆんらいが乗りこんだのを機會きかいに、船ふねを出だしました。船ふねが川の半なかほどにも來こないうちに、順禮じゆんらいの老人らうじんはお腹なかが痛いたいといつて、

もがきはじめました。

「そいつは、いけねえ。」

渡し守は順禮の苦しみを知らると、いつもよりも急いで櫓を押しました。

そして、岸に船がつくと、さつそく順禮をおぶつて、小屋のなかへつれて

行きました。

「おつかあ。この方のめんだう見てくろ、頼むせ。お腹が痛みなざるん

だからな。」

渡し守はおかみさんにさういつて、あれこれとさしづをして、二人がか

りで手ぬかりなく、親切に介抱いたしました。

小屋の隅にかゝつてゐる竹筒の中の薬を飲ませたり、お腹を温めるため

に、温石をつくつたり、寢床に寝かせてからも、いろいろと慰めもし、い



たはりもしました。

狭い、むさくるしい小屋、荒壁の隙間からは、寒い川風が吹きこみまし

た。入口に雨戸がはりにぶらさげてある筈をはためかして、はたはたと風

が淋しい音をたてました。また、布團はいへば、綿のはみ出てる、き

たないごつごつした木綿の布團でした。

けれど、この狭い小屋のなかには、なにもものにも比べることのできな

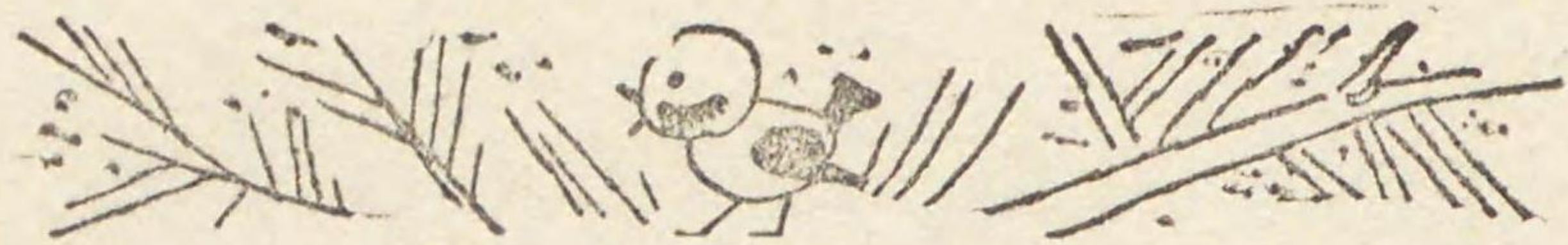
い、温かい心が充ち溢れてゐました。

人はかうした温かい心に出あふ時、しみじみしたうれしい氣持を感じて、

おさへてもおさへてもおさへきれない涙のなかに、ただもうありがたいと

いふ心でいつぱいになります。

この順禮がさうでした。思ひがけない深切に出あつたので、枕がぬれて





しとるほど、とめどなく涙を流しながら、二人に向つてお禮を申しつづけました。

「おたがひさまだあ。そんなに、つづけさまに、お禮をいつちやいけねえなあ順禮さん。それよか、氣を安めて寝てみちやどうだね。ひと眠りするど、お腹もめつきりよくなるだらうしなあ。」

渡し守は、順禮がお禮をいひつづけるのを、却つて氣の毒さうに、さういふのでした。

かうして親切に介抱されたのですが、順禮の病氣はあまりいゝ方向ひませんでした。二日三日とたつうちに、むしろ悪くなつて行くやうでした。

渡し守はいつさう氣の毒に思つて、遠い道を隣村まで行つて、お醫者か

ら藥を貰つて來たりしました。

(三)

ある日、順禮は渡し守に向つて、ていねいにお禮をいつてから、改めて一つの頼みがあるから、せひ聞きとどけてほしいといひました。

「頼みといふのは、ほかではありません。實はわたしも、今度はいよいよだめだと思ひます。つきましては、この世を去るまでに、せひ女のひとの乳房から、ぢかにお乳を飲ませてほしいのでございます。妙な願ひだと思召すでせうけれど、さうしなければわたしは往生が遂げられません。一生の願ひです。今まで親切になすつて下さつたのですから、どうぞこれを聞きとどけて下さいませ。」





順禮の願ひ

一一八

渡し守も心のなかでは、順禮が二三日のうちには、この世の人ではなくなるだらうとひそかに思つて心を痛めてゐました。できることならば、なんなりとも願ひをかなへてあげたいと、實は順禮から頼まれた時には、心をきめてゐたのでした。けれど、その願ひを聞いて見ると、あまりにも意外なことなので、すぐには返事もできずに、たゞ腕を組んでちつと首をたれてゐました。

順禮の顔には不氣味な死の影が現れてゐました。頬はげつそり落ちくぼみ、色はひどく青ざめ、鼻の肉は落ちそげて、鼻すぢが高く骨ばつて見え、そして、白い髭はうすぎたなくなつて、口のまはりによれよれになつてゐました。そして、血の氣の失せた唇は、紫色に變つて、さも冷たさうに見えました。



この顔を胸近く近づけて、ふつくらした乳房をその口に含ませるといふことが、どんな女にできるでせう？ 氣味わるくて、心もおびえて、考へただけでも、ぞつとしてしまふでせう。それも、これが子供といふのならまだしも、六十はたしかに越えてゐる老人、然もどこの誰ともわからぬ人。もしもたくさんなお禮でも出すといふのなら、あるひは慾を出して、眼をつぶつてでも、やつて見るといふ女を、見つけることもできませう。けれど、すこしのお禮さへも、出せさうにないこの順禮のために、誰がそれをするでせう。一生の願ひをかなへてやるのだから、功德になる、りつばな善事だと、口を酸っぱくしてすすめても、それをする女はありさうにもないことです。

渡し守とても、やはりさう思つたのでした。手に餘ることだと思つたの

でした。

「一生の願ひです。どうぞわたしを喜ばしてくれる女の人を探して下さいませんか。わたしを迷はさずに、往生を遂げさせてくれる、女の人を探して下さいませんか。」

順禮の老へは、渡し守のだまつてゐるのを見ると、せつなさうにまたも頼むのでした。

(四)

その時、渡し守はついと座を立つて、小屋の外で働いてゐるおかみさんのところへ来ました。そして、順禮の老人のいつたことを、くり返してひきかせてから、

「お前に頼むのも氣の毒だが、ほかの女が承知してくれることじやねえ。ひと一人の一生の願ひだ。今までせつかく世話したもんだ。なあ頼むせ。」
といひました。

「ほかのことなら厭とは思はねえけど、そればかりは許してくんされ、この乳房は坊やのもんだに。」

「でも一生の願ひだものな。考へても、身ぶるひすることだけんど、これもなにかの因縁だ。きつぱりやつてくんろよ。」

長い間、そんなふうには、言葉を盡して夫から頼まれましたので、とうとうおかみさんは承知しました。けれど、心配さうな顔をして、襟をはだけて、白いふくよかな乳房を出して、溜息をつきながら眺めてゐました。

「ありがたい。承知してくれたら、早い方がえゝぞ。」



夫からうながされるので、おかみさんは夫といつしよに順禮の老人の
ころへ來ました。

「うちの女房に承知させました。」

「さうでしたか。それはなによりありがたいことです。これでわしも浮ば
れます。」

老人はうれしさうに涙ぐんでいひました。

おかみさんは、老人の顔のところに坐つて、胸をひろげました。そして
右手で右の乳房をつかんで、身體をかがるやうにして、乳房を老人の口
のほとりへ持つて行きました。老人は枕から少し頭をあげて、顎を突き出
すやうにしながら、黒い乳首に口を持つて行きました。
その時、ふいに老人はがくりと頭を枕に落して、

「それでよい。それでよい。」
といひながら、さめざめと泣きました。

「どうしたんです。どうしたんです。」

思はず渡し守は、さう叫んで、老人の傍ににじり寄りました。

「あゝ許して下さい。でも仕方がなかつたのです。試すよりほか仕方がなかつたのです。けれど、もうわかりました。」

と、老人は涙が咽喉へ流れこむせゐるか、苦しさに咳きこみながら途切れとぎれにいひました。

おかみさんは、老人の背中を撫でさすりました。あまり突然だつたのでまだ乳房をふところへしまふのも忘れてゐました。

「試しなすつたつて？ なにを試しなすつたのです？」



と、渡し守は驚いていひました。

(五)

「實はわたしは腹巻の中に、大金を持つてゐるのです。あなた方ふたりの親切には、すつかり感じてゐましたけれど、もしかしたらわたしが、大金を持つてゐるのを知つて、親切らしく介抱して下すつたのかとも疑ひましたので、乳房を口に含んで乳が飲みたいなぞと、強ひて申しあげて、お心を試したのです。一生の願ひだといへば、憫れんで女を探して来て下さるかどうか、それによつてお心を知らうと思つたのです。ところが、あなたは自分のおかみさんを説き勤めて下さいました。できないことです。これでもつて、わたしはあなた方ふたりの心を知りました。前世につながる因





縁です。決して他人とは思ひません。どうぞ死にましたらばこの金で……。」
 と老人はきら／＼光る小判を出して、「わたしの跡を葬つて下さい。わたしは誰一人として身よりのない、ほんとの一人ぼっちです。ですから残りの金は、全部あなた方のお役に立て、下さいませ。」
 と、涙ながらにいひました。

渡し守夫婦は、意外なことを聞かされ、ついぞ見たこともない大金を、眼の前に見たので、たゞもう驚いて顔を見合せました。いつの間にか、日は暮れてしまつて、小屋のなかは薄暗くなつてしまひました。親を慕ふ小雉子でせう、裏の藪の方で淋しく鳴く聲が聞えました。

老人が息を引き取つたのは、それから間もないことでした。老人は満足して、この親切な渡し守夫婦に抱かれたまゝ、安らかな長い眠りつきまし



た。夫婦は自分たちの父が死んだやうな気がしました。夫婦はこの不幸な順禮のために熱い涙を流しました。

ふと、おかみさんは、老人の静かな顔に嬉しさうな笑ひがあるのを見てもかういひました。

「もしかしたら、この御老人は佛さまの御化身ぢやないでせうか。」

「さうかも知れない。」

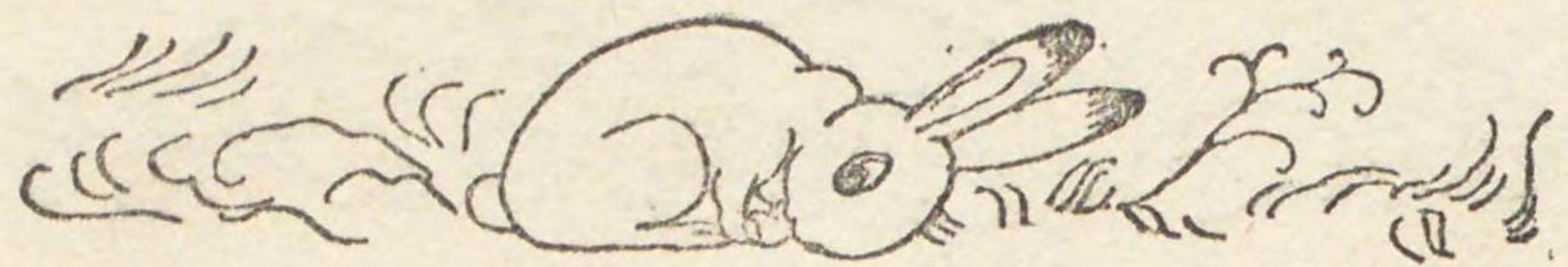
渡し守はたつた一言さういつたばかりでした。

だが、もちろん、その順禮の老人は、たゞの老人であつて、佛さまがかりに姿をお現しになつたのでもありません。

お話のしめく／＼りとしては、佛さまがかりに姿を現したのだといつた方が、ひよつとしたら、お話をうら／＼とよいかも知れませんが、さうでないとい



ころに、却つて、強くわたしたちの心をうつものが含まれてゐるのではな
いでせうか。



いざといふ時

(一)

廣島にゐる叔父さんが、今度轉任になつて東京へ住むことになつた。い
ちばん喜んだのは啓子である。

「まあ、うれしい。それちや安雄さんと、これから遊んだり勉強したりで
きるわ。」

安雄といふのは叔父さんの長男。啓子とおなじ五年生。もう近所の貸家
を借りることになつて、叔父さんの家もきまつたから、たぶん安雄も啓子
と同じ山櫻小学校へ通ふことになるにちがひない。



お母さんは、啓子に向つて、笑ひながらいつた。

「遊んだり勉強したりはいいけど、あんた安雄さんの妨げをしちやいけな
いよ。」

「妨げなんかしないわ。安雄さん東京のことや學校のことを知らないから
あたしなんでも、教へてあげるわ。」

「おやおや、おない歳のくせに、いやにお姉さんぶつて……」

「あら、いやだ、お姉さんぶつてるんぢやないのよ。親切でいつてるんだ
わ。」

啓子は、ちよつと、口を曲げて、軽くすねた。

「さう、それならごめんさい……とにかく、まあ仲よくしなさいよ。」
「ええ。」



ちやうど、その時、誰か臺所へ來たので、お母さんは座をはづして行つ
た。

啓子は、縁側へ出て、柱にもたれて、廂の下から空を仰いだ。

夕暮の空、さつきまでよく晴れてゐたのに、妙に風だつて灰色の雲が飛
んで行く。秋の空は變りやすい。啓子は、雲を見ながら、雲の中に、まだ
見ぬ安雄の顔をぼんやりと思ひ浮べてゐた。

寫眞はあるけど、それはまだ安雄が二年生ぐらゐの時の寫眞で、叔父さ
んや叔母さんといつしよにうつつてゐた。啓子はその幼な顔の安雄から、

現在の安雄の顔を想像して描いてゐた。

啓子は、たつた一人つ子、安雄は男三人の兄弟のいちばんうへ。さみし
い啓子は、なんとなくうれしかつた。ほんとに、いつしよに勉強もしたい



し、遊んでもみたかつた。兄さんも弟もないさみしさが、さうすればいくらか紛れるであらう。

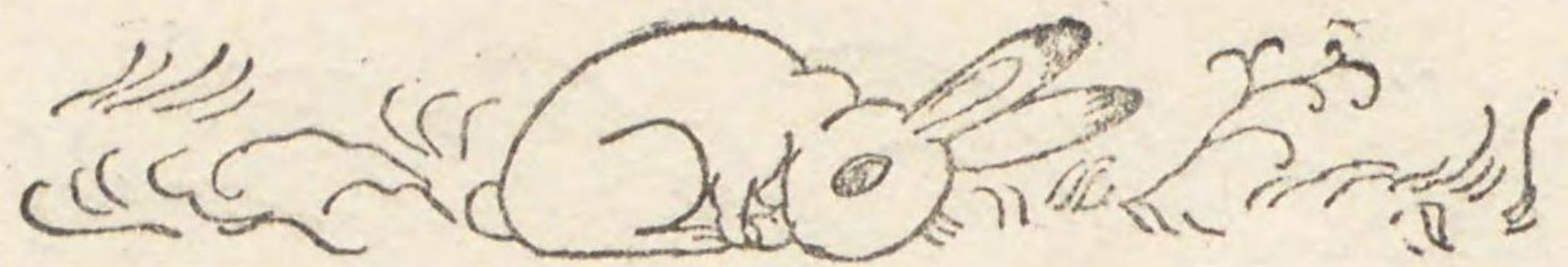
啓子は、なんとなく心が浮きたつた。

(二)

叔父さんの家が東京へ越して来る日を、啓子は指を折つて待つた。ちやうど、日曜日にあたる日に、叔父さん一家が、東京へつくことになつた。

「あたしお迎へに行きたいわ。十時に東京驛へつくんでせう。」

啓子は、お父さんといつしよに、東京驛まで迎へに行きたくてたまらなかつた。



「うん、行つてもいいけど、お前はお母さんといつしよに、叔父さんの家の掃除をしたり、さきへ送つた荷物が、いくらかついてゐるから、あれを整理したり、いろいろ用事をしたらどうだね？」

「ええ……でも、あたし早く行つて見たいわ。」

啓子は、安雄や弟たちに、早く逢ひたくてたまらなかつた。

「どうだい、お母さん、啓子をつれて行かうか？」

「ちぎ逢へるんだから、啓子や、残つてゐて、お晝の御飯のお支度を手傳つておくれ、ね、いいでせう？」

お母さんから、さういはれると、啓子はむりもいへなくなつて、

「おいしいものを作つて、喜ばしてあげよう。」

啓子はさう思つたので、素直にあきらめた。



「ええ、ぢや、あたし残りますわ。」

「えらい、えらい……さういふふうには、素直でなくちやいけない。なんでも安雄は、學校もよく出来て、なかなか性質もいつていふことだから、これから負けないやうにしないと……安雄だつて府立を受けるだらうが安雄だけが府立へ入つて、お前が府立へ入れないと恥だよ。」

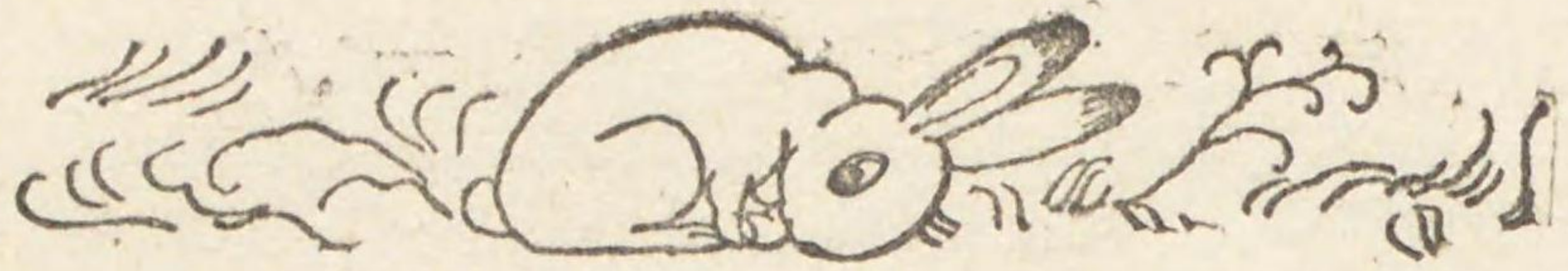
啓子は笑ひなが云つた。

「なんだか、あたし、よつほどしつかりしなくちやならないやうね……、萬事安雄さんと比較されるから……。」

「うん、まあ、さうだな。」

お父さんは、さう云つて、大きな聲で笑つた。

それから、お父さんは腕時計を見て、



「あ、もう一時間たつと着くな、どれ、出かけるか。」
と、いつて立ちあがつた。

(三)

お父さんが行つてしまふと、啓子は、

「お母さん、お晝はなにを作るんですかと、尋ねた。」

「さうね、なににしようかしら？ 大勢だから、ちらし壽司がいいね……いちばん世話がないから。さうしませう……ねえや、といつしよに、八百屋へ行つて来て貰ひませう。」

そこで啓子は、お母さんから、椎茸や玉子や人參や、お壽司に使ふもの



をいくら買ふかみんな聞いて、ねえやといつしよに買ひに行つた。

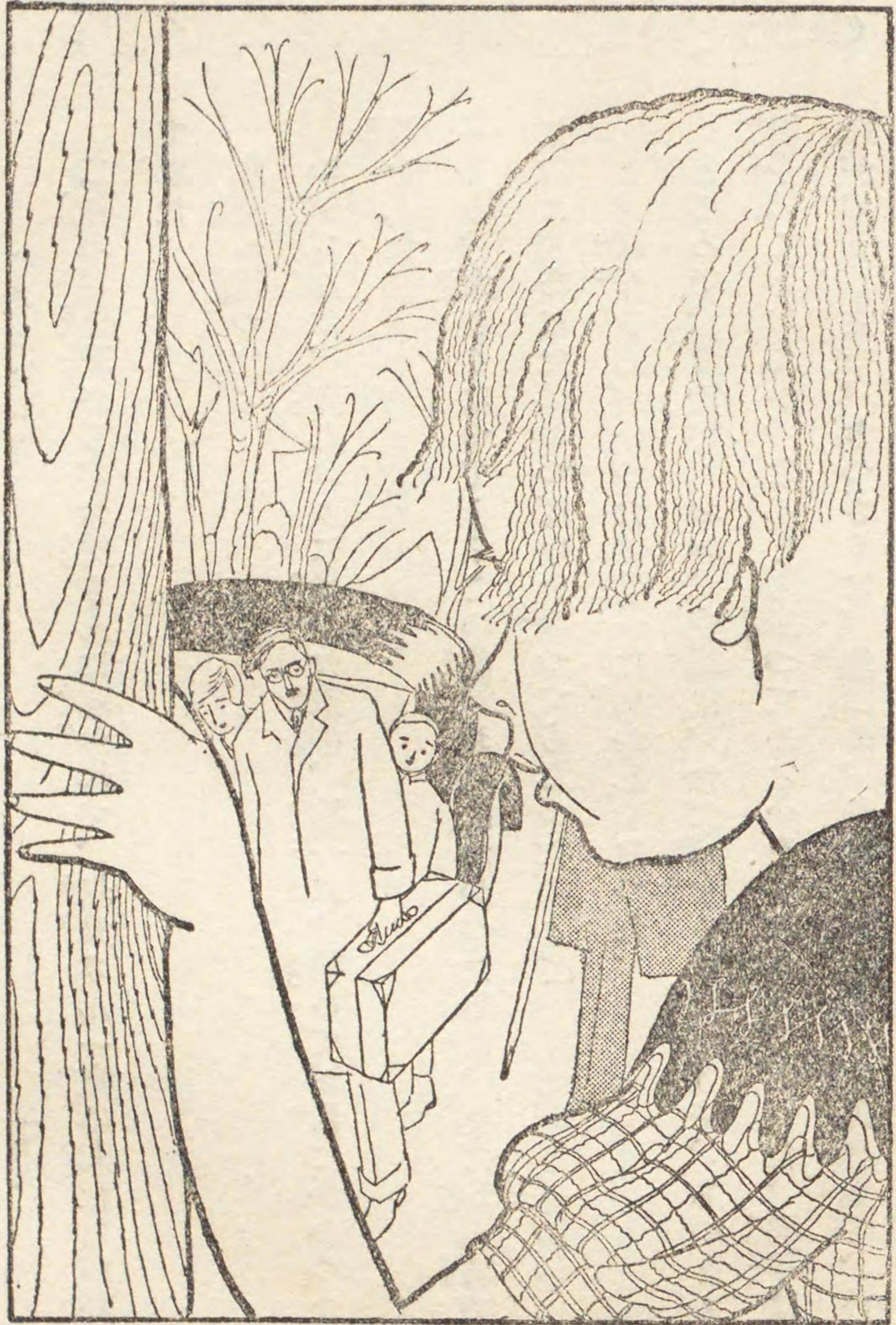
歸つて來ると、それを洗つたり、刻んだり、煮たり……お母さんに教はりながら、啓子はいそがしく立ち働いた。

「お母さんといつしよに、お壽司を作つたことを知れば、安雄さんはどんなにびつくりするだらう？ そんなこともできるのかと、驚くにちがひない。そして、たいへんおいしいといつて食べてくれるにちがひない。」

啓子は、そんなふうにかんがへながら、ほほゑみを顔に浮べてゐた。いつもはあまりうれしいと思はれない臺所の仕事で、今日はなんとなくうれしかった。やがて、自動車の止まる音が表でした。

「ほら、いらした。」

啓子は、すぐ玄關へ出て行つた。





いざといふ時

一四八

二臺の自動車から、お父さんに導かれて、叔父さん一家の人たちが降りて来た。

座敷へ通つた。

お母さんは、久しぶりに逢つた挨拶、啓子は、初めてお目にかかつた挨拶をした。

「まあ、大きくなつて……この前、お目にかかつた時は、まだ赤ん坊でしたのよ。あなたはおつぱいを吸つてらしたつたのよ。」

と、叔母さんがいつた。啓子は恥かしくなつた。

ところで、安雄は？ おお、安雄は、ただ頭をさげただけで、ちつとも、啓子のことなんか、なんとも思つてゐないやうなふうであつた。啓子は、いがぐり坊主で、きつさうな、無口の、負けん氣らしい安雄を見て、いろ



いろ想像してゐたことが、みんなどこかへ吹き飛んでしまつたやうな氣がした。

「これでは、お壽司だつて、おいしいなんて食べてくれさうでない。」

いろいろの話の末に、間もなくお晝になつたが、お壽司をほめてくれたのは、叔父さんと叔母さんだけで、おまけに、よくお手傳ひができるといつて、啓子のことをほめそやしたが、安雄は、黙つてぼそぼそ、あまりおししさうにもせず箆を動かしてゐた。

啓子はがっかりしてしまつた。

(四)

近所に住んで、啓子とおなじ山櫻小學校の五年に通ふやうになつたが、

いざといふ時

一四九



安雄は啓子と親しくはなかつた。

「なんだ、女なんか……」

たしかにさう思つてゐるやうであつた。

どうかして、遊びに来たりしても、啓子はいろいろ話しかけるのに、安

雄はろくに返事もしなかつた。

「安雄さんが女だつたら、どんなによかつたらう！」

啓子は、しばしば、さう考へた。

けれど、ある日、啓子は風邪で學校を休んだ。秋といふものの、急に氣

温がさがつて、裕のうへに羽織がほしいやうな日がつづいたせゐだつた。

その日、安雄は學校から歸ると、心配して見舞ひに来た。そして、いろい

ろと親切に、水枕をかへたり、薬をとりに行つてくれたりした。そして



今日學校でならつたことを話したり、啓子の雜記帳を出して来て、書きこ

むことを書きこんでくれたりした。

おお、それはほんとの兄さんのやうな氣持であつた。心からやさしく、

いたはつてくれた。

啓子は、うれしくつて、病氣なんかすぐになほつてしまひさうだつた。

「やつぱり安雄さんは、いい方だつたのね。わるく思つてゐて濟まなかつ

た。」

啓子は、心のなかでお詫びをした。そして、うれしくて、涙が目にたま

つて来るのを堪へることができなかつた。

「安雄さんみたいなのが、ほんとの男の子だわ。いざといふ時に、頼みに

なる方だわ。」



啓子は、自分が一人つ子で、兄弟の味を知らなかつたが、今はじめて、自分も一人つ子ではないやうな気がした。

啓子の病氣はなほつた、安雄はやつぱり、もとのやうに、無口であるし啓子とも遊ばうとはしなかつたが、もう啓子は、安雄のことを、けつして厭な人と思ひはしなかつた。

啓子は、安雄の美しい心を知つてゐた。そして、却つてさういふ性質の安雄を男らしいと思つて尊敬した。

鏡のない村

その村には鏡といふものがありませんでした。だから、自分の顔や姿を見ることができませんでした。

自分の顔や姿を見ないといふことは、まったくのん氣なものです。年をとつて、白髪ができて、皺がよつても、自分でそれに氣づくことはありませんでした。他人からいはれても、自分で鏡にうつして見るのとは異つて、さほど氣にかかるものではありませんでした。

そんなふうでしたから、自分の顔や姿が、美しい、といつて、己惚れる人もなく、自分の顔や姿が、醜いといつて、悲しむ人もありませんでした。





鏡のない村

美しいとか、醜い

とかいふ

ことは、この村で

は

さ

ほ

ど

問題

になりはしませ

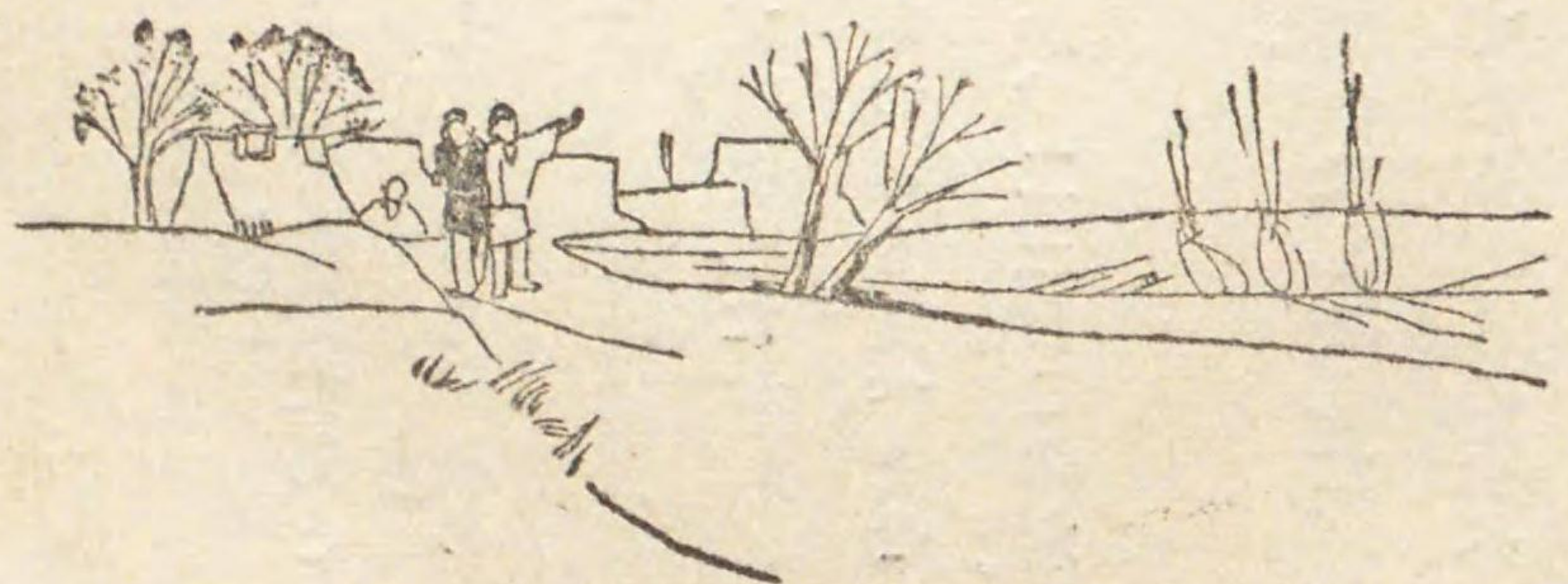
んでした。
ところが、この村へ、ある日、一人の旅人が道に迷つてやつてまゐりました。この村は深い山の裾にあつたの



で、それまではよそから誰一人やつてくるものもなく、村の人たちだけで、静かな平和な暮しをしてゐたのでした。

食へものは村の人達が耕すだけで、たつぷりでしたし、着るものも村の人たちが、織るものだけで充分でした。よその人たちと取引することは、ちつとも必要ではありませんでした。従つて村の人は、生れば一生をこの村で過し、よそに出て行く人はありませんでした。だから、初めて他國から来たこの旅人を見た時の、村の人の驚きはたいしたものでありました。「あれ、まあ、妙な人が来たね。」

鏡のない村





「どこから来た人だらう。」

「變な着物を着てゐるね。」

そんなことを、皆はひそ／＼とささやきあひました。そして自分たちと同じやうな恰好をした人間が、よそにもゐるとは聞いてゐながらも、初めて眼のあたりに見えては、ふしぎに思へてなりませんでした。

旅人は、やがて村の人たちが集つてゐるところへやつて來ました。

「あの、まことに濟みませんが、道を迷つて、今朝からちつとも食べませんし、もう疲れが出て、どうしようもありません。どうか、二三日この村で休ませて下さい。」

もとより清い心を持つてゐる村の人たちは、大そう同情いたしました。

そして、別に宿屋とてないので、村での口ききになつてゐる老人の家へ



泊めることに相談をきめました。

「それはお困りでせう。ではわしの家へいらつしやい。他國の方のお口にあふものもないでせうが、ごゆるりとお泊りになつて下さい。」


「どうもありがたう存じます。」

と旅人は、眼に涙をうかべながら、心からお禮を申しました。

村の人たちは、この旅人のところへ來て、それからといふものは、毎日のやうに他國のお話をして貰ひました。そして、今更のやうに他國の話に驚きました。

「へえ、そんなことがあるのですかねえ。」

と、誰も彼も心から感じ入りました。そして、なほも／＼とお話をねだりました。



三十三夜、つづいてお話をしたので、もう旅人もお話の種がなくなりま
した。それで、三十四日目の朝、


「では、私はもうお暇をいたします。なかなか御厄介さまでした。おかげ
さまで、ほんとに命拾ひをいたしました。」

といつて、旅人は出発のあいさつをしました。

村の人たちは、

「いえいえ、それどころではありません。私たちも大へんおもしろいお話を、
いろいろな伺ふことができて、なによりでした。」

と、却つて、こちらからお禮をいふやうな次第でした。旅人は村人たちの
清らかな心に、これまでもなにかにつけて、感心させられて來ましたが
さういはれてみると、ますます感心してしまひました。



「實はなにかお禮をさしあげたいのですが、旅のこととてなにもさしあげ
るものがありません。けれど、この間から、氣がついてをりましたので
が、この村には鏡といふものがありません。それに、深い井戸を掘らなけ
れば、水も出ませんし、谷川とてもないので、鏡のない人たちがするやう
に、この村の人は水鏡をして、自分の顔や姿を、見ることもできません。
つまりどなたも自分の顔や姿が、どんなものかはつきり御存じではないの
です。それで、私はちやうど、一つの鏡を持つて來てをりますから、これ
をさしあげることにはませう。」

旅人は、心からいいことをするつもりで、ていねいにかういつて、財布
の中から一つの小さな鏡を取り出しました。

ちやうど、あたたかい日のさしてゐる縁側にゐたので、鏡を出すと、光

はさらさらと鏡に反射いたしました。そこにゐた村の人たちはびつくりしてしまひました。

「まあ、それを手にとつて、自分の顔の前に出してごらんさい。」

旅人はにこにここと笑つて鏡をさし出しました。それで旅人を泊めた老人が、こはごは鏡を手にとつて見ました。そして薄



氣味の悪さうな表情をして、顔の前を持つてゆきました。

ところが、まあ、どうした

といふんでせう。老人は、

「あつ！」

と叫んで、その鏡を取り落

さんばかりに驚きました。その容子を見た村の人たちも、思はず手に汗を握りました。

「どうしなすつた？」

「どこか、痛かつたのかえ？」





口々に皆はいひました。旅人は初めて鏡を見たので驚いたのだと思つてゐましたから、さほど氣にもとめてゐませんでした。

老人は、呼吸もつまるかと思はれるほど、緊張した容子で、今度は鏡を裏へ返してちつと眺めたり、指さきで、こつこつ叩いてみたりしました。そして、やがて村の人たちに向つていひました。

「こんなものを見るものぢやないぞ。わしは驚いた。わしはこんなにも白髪があつて、こんなにも皺があるとは思はなんだ。せめては、お前ぐらゐだと思つてゐたに。」

と云つて、集つてゐる人たちの中の四十恰好の男を指さしながら、なほも言葉を續けました。

「ああ、つまらないわい、こんなものを見るではなかつた。なあもし、こ



れにうつるのは確かにわしの顔でございますか。」

旅人はすこし氣の毒になつて、

「ええ、あなたのお顔です。」

といひました。

老人はそれを聞いて、

「つまらない、つまらない。」

といつてをりました。けれど、老人はふと考へついて、

「なあ、お前、この鏡にうつつてゐる顔と、わしの顔とを見比べてほしいんだがね、そしてこの鏡にうつてゐるのが、ほんとにわしの顔だつたら、わしはもう決して、二度とはこの鏡を見ないぞ。」

とやや氣色ばんでいひました。



そこで、一人の村の男が顔をさしのべました。そして、ちつと鏡に寫つた顔と、老人の顔とを見比べました。やや首を傾けてから男はいひました。

「瓜二つだ。やつぱりさうだ。あなたの顔に違ひない。」

といひながら、

「ほんとに不思議なものだな。」

と、溜息まじりにいひました。

老人は傍の見る眼も氣の毒なほど、がっかりしました。

「ああ、わしももう長いことはないわい。」

と、誰に向つていふともなくいひました。

旅人は、はじめて悪いものを見せたと思ひました。それで、後でとやか



ういはれてもと思つたので、そのまま別れの挨拶を述べて、その村を出て行きました。

けれど、その日から村には鏡のために、大へんな騒ぎが起りました。第一に老人はその日から急にがっかりしたために、病氣になつてしまひました。そのほか鏡が村の人たちの手に渡つて、次から次へと顔や、姿をうつすにつれて、あちらにもこちらにも悲劇が起りました。

ある妻は自分の顔をはじめ見て、こんなにも美しい顔だったのかと思ふと、醜い夫がかはいさうになつて、もつといい器量になるやうに神様にいのりました。ある男は自分が不具であることを、あまりにまざまざと見せつけられたので、悲しみのために、深い井戸へ飛びこみました。またある女は自分の醜いことを恥ぢて、お嫁に行くことを取消しました。



こんなふうで、平和な静かな村は、忽ちのうちに悲劇と混亂の中に投げこまれてしまひました。

やがて、村の人たちは相談をしなければなりません。そして長い間の相談の後で、遂に鏡を埋めてしまふことになりました。同時に村の人たちの心の中には、今まで覺えたことのない、憎しみの心が起りました。鏡を憎むことはいはずもがな、旅人を憎む心が深く深く根ざしました。

ある日、鏡は山の中腹に深く深く埋められました。村のおもだつた人々は、それを見て、もうこれでいいと思ひました。安心の色が誰の顔にもありません。これからは以前のやうに、村も平和に静かになつてゆくことだらうと思ひました。



鏡を埋めたところからは、その翌年の春、小さな白い花が咲きました。掘り返された土もすっかり平らになつて、白い花のためにおほはれたのでそこらを通つても村の人たちは鏡を埋めた場處を、思ひ出すことはありませんでした。

かうして、すっかり鏡のことを忘れてただ傳説めいた話として、鏡のことが話される頃には、ほんとに村は静かに平和なものとなりました。村の人たちの心も、清く美しくなつて、いつか憎しみの心をも忘れてゐました。

靴の物語

(一)

「きれいな、かはい靴。しなやかな、あかい、なめし皮の靴。踵がすつきりと高く、さきはなだらかな圓味をもつてとがり、ななめ十文字の留め皮には、光つた銀の飾り釦がついてゐる——ああ、あたしほしいわ。さういふ靴がほしいわ。ほんとに、ほしいわ。」

初枝は肋膜がわるくて寝てゐましたが、いつも靴のことを、たくさん考へるのでした、お薬のことよりも、食物のことよりも、靴のことを考へる方が多いのでした。



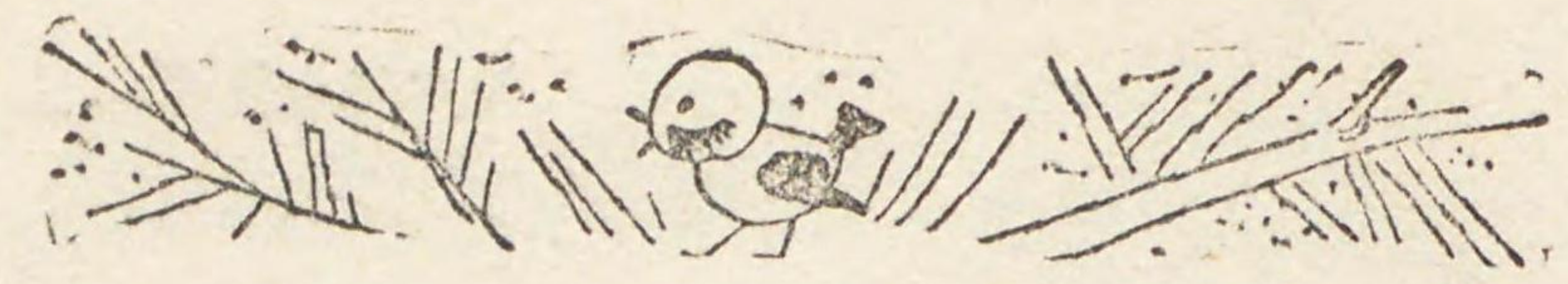
初枝は、たぶん西洋名畫の三色版のなかで、こんなきれいな、かはい靴を、見たのちがひないのです。初枝は、今では、はつきりと、どこでかういふ靴を見たのか、おぼえてはゐませんでした、まるで目の前に、さういふ靴があるやうに、こまかく、いちいち、靴の特徴をまぼろしに描くことができました。そして、そのあげくの果てに、

「あたしほしいわ。」

と、つぶやくのでありました。初枝のそのつぶやきは、ちやうど夏の日に、山道を歩く旅人が、汗みどろになつて、疲れた足をひきずりながら、

「ああ、水がほしい。」

と、つぶやくのと、おなじくらのものでありました。



けれど、初枝は、その願ひを、お母さんにも、お姉さんにも、うち明け
ることができませんでした。

なせ？ どういふわけで？

だつて、初枝はちんばでありました、左はきれいな足で、それこそ櫻貝
のやうな爪が、よくそろつた五つの指に、夢みるやうに並んで、甲も高く
はないし、幅も廣くはないし、ほんとに立派な足でしたが、右の足は、弓
なりに曲つて、甲が高く飛びあがり、然も、しなびて、ごつごつしてゐた
のです。だから、そんな足に、靴がはけるわけがないのです。

それでも、昔は、

「ね、お母さん、あたしに靴を買つてちやうだい！」

と、なんの考へもなく、他人にはける靴なら、自分にもはけると思つて




そんなおねだりをして、お母さんの眉をくもらしたこともありました。そ
れは、無邪氣だつたからいへたのですが、もう今となつては、とてもそん
なことがいひ出せるものではありません。

初枝は、いつも靴のことを考へる度に、なんだかさびしくなつて、掛蒲
團を目のところまで引つばつて、その蒲團のかけで、唇をかんで泣きま
した。

(二)

初枝の病氣は、だんだん重くなつて行きました。濕布をあてたり、氷で
冷したりする日がつづきました。南向きの窓のガラスを、わびしい雨がぬ
らすやうな日に、初枝の顔は青ざめて、すこしも元氣がないのでした。





家のなかには、重くろしい溜息が、かさなり合つてよどんでおりました。殊にお母さんと姉さんとは、初枝の介抱をしては、たまらなくなつて部屋を出て、そつと袖で涙を拭くのでありました。

「ねえ、お母さん！ 初枝さんはかはいさうね、あたし、なにか初枝さんの好きなこと、なんでもかなへてあげたいと思ひますわ。」

姉さんは、ものかげで、お母さんに向つて、聲を落して、さういひました。

「ええ、どうせいけないものなら、なんだつて、してやりたいものだねえ。」

お母さんは、もとよりいやとおつしやる筈はありません。匂はしい少女の春にも逢はずに、世を去つて行くいぢらしさは、針よりも鋭く胸をさす

のでありました。

その夕べ――

すこしは気分もすぐれて、牛乳もいつもよりはよけい飲んだので、さつそく姉さんは、初枝にたづねました。

「ねえ、初枝さん、あなた、今、いちばんしたいことなあに？ 今、いちばんほしいと思ふものなあに？」

こんなことをいひ出して、病氣がとても重いのかしらなどと、變に氣をまはされることのないやうに、姉さんはなんでもなささうに、つくり笑ひをしながら、氣輕にたづねたのでした。

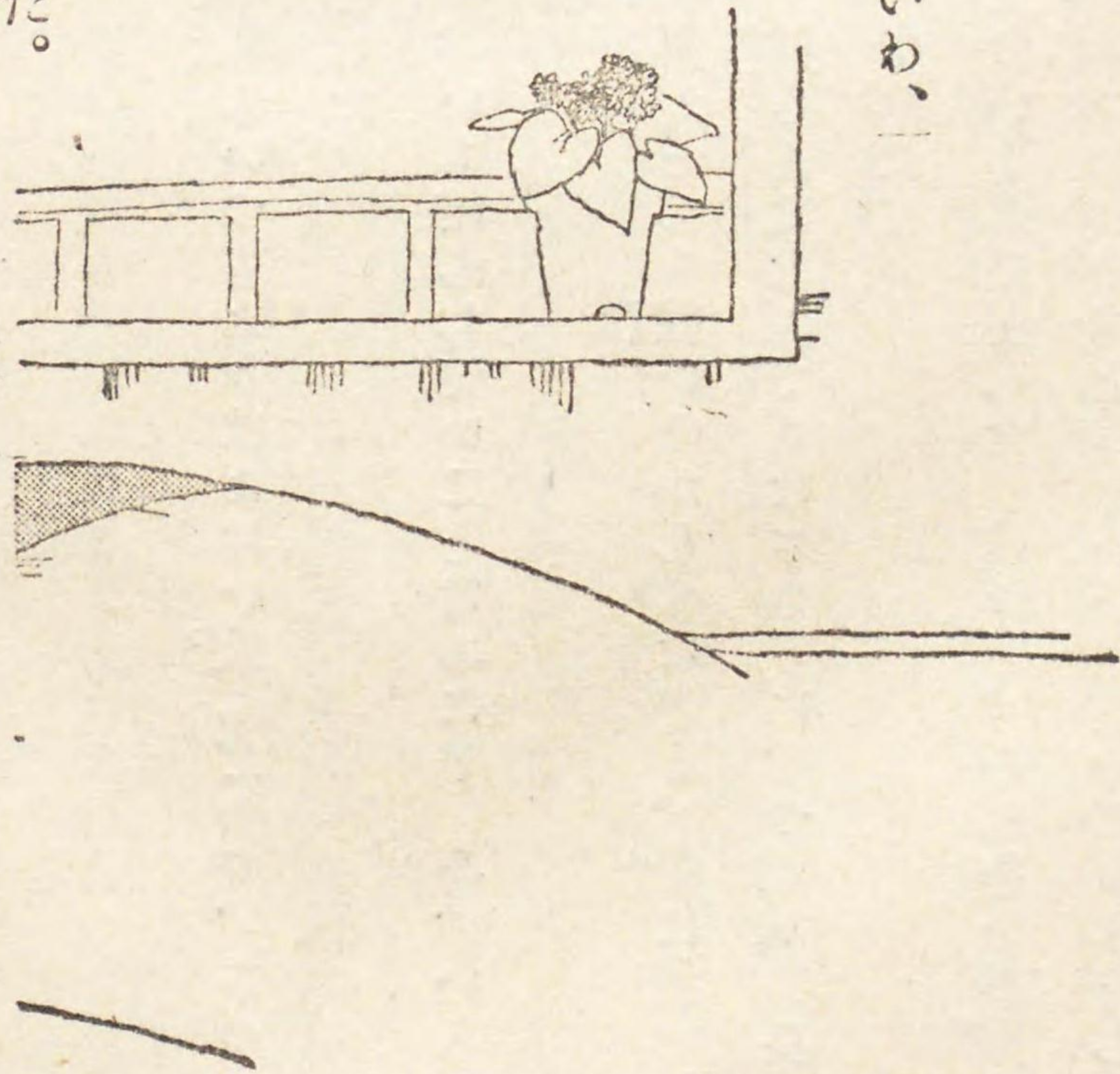
初枝は靴のことを、いひ出したいと思ひました。けれど、それをいひ出すと、姉さんを悲しくさせると思つたので、それをいひ出さずにおさまし



た。
 それで、わざと、
 「あたし、なんにもしたかないわ、
 なんにもほしくもないわ。」
 と、いつて、初枝は元氣
 さうに笑つて見せました。
 けれど、その笑ひはさびしい
 笑ひでありました。

その晩、初枝は夢を見ました。

(三)



例の、きれいな、かはい
 靴があるので、取らうとして
 手を出すと、見る見るうちに、白
 羽根が生えて、小鳥のやうに
 飛ぶのです。そして、つかん
 だかと思ふと、するりと手を
 すべりぬけて、飛んで行つてしま
 ふのです。

「あたし、ほしいわ、あの靴がほしいわ、ほ
 んとに、ほしいわ。」
 いつも、つぶやく言葉を、この時ばかりは、大きな聲で、思ひきり叫ん



でしまったのでした。

ところが、ふつとその時、初枝は目がさめました。すると、お母さんの呼びたてる聲が耳に入りました。

初枝はきよとした顔で、お母さんを見ました。

「まあ、初枝さん、うなされたんですよ。氣持がわるくないの？」

「いいえ……。」

初枝は、お母さんの頬を、涙がぬらしてゐるのを見て、すぐに夢のことを思ひ出して、ほつとしました。

「お母さん、あたし夢のなかで、大きな聲を出したでせう、あれ、はつきりお聞きになつて？」

「ええ、聞きました。」



お母さんは、もう堪へられなくなつて、泣いてしまひました。

「ごめんなさいね、お母さん！ あんなこといつて、悲しがらせて……でも、あたし、自分の足のことは、あきらめてゐますのよ。だけど、なせかあれがほしいんですの。ほんとに、ほしいんですの。」

「さうを、ちや買つてあげませうね、あれつて靴のことでせう？」

「ええ、あかい、きれいな靴……。」

「踵の高い、半靴ならいいでせう？」

「ええ……。」

そのあくる日。

姉さんは、お母さんにいひつかつて、銀座へ出て靴を買つて來ました。

「あたしの考へてゐたのより、ずつとずつといいわ！」





初枝は、靴を枕もとにおいて、しみじみと、眺めてをりました。さて、かはいさうに、初枝の病氣は、とうとうよくなるらないで、この世を去つてしまひました。

お母さんは、涙とともに、初枝の足に、靴をはかしました。生きてゐる時に、たつた一度もはいたことのない靴、それを初枝の冷たくなつた足がはきました。

お母さんは、それをはかすと、

「かうして寝たままだと、どうやらちんばといふこともわからない。」と、心につぶやくのでありました。

思ひなしか、はじめてはく靴の、はき心地を楽しんでゐるのか、初枝の顔には、ほほゑみが浮んでゐました。



お母さんは泣きながら、初枝の姉さんにいひました。

「いつかの夢のやうに、この靴に羽根が生えて、それに乗つて初枝さんの魂は、天へのぼるんだよ、きつと、さうだよ。」

西洋人形

(一)

その日、お辰がとなり村の小學校から歸つて來ると、父親の平作は、大
汗になつて、跛の足をひきずりながら草とりをしてゐた。

「父ちゃん、草とりけえ？」

「うん、明日、お邸の人が來るつてからな。」

「さうけえ。お邸の人たくさん來るのけえ？」

「奥さまとお嬢さまと坊ちやんと、それから女中が二人だとよ。」

「ふん、さうけえ。」



お辰は、どんな人たちだらう
と思つて、まだ見ぬお邸の人た
ちを想像しながら、ちつと海の方
を見た。海は青く輝いてゐた。

「別荘は掃除したのけえ？」

「うん、すつかり済ましただ。」

「そんなら、おらも草とりをすべえ。」

お辰は、邸の隅にある小さいうちへ走つて行つた。

そして、本づつみを置くと、きたない麥藁帽子をかぶ

つて、すぐにひき返して來て、さつそく父親といつし

よに草とりを初めた。

